
俺達と私達の最幸な世界

ていん?がー!

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺達と私達の最幸な世界

【Nコード】

N1632X

【作者名】

ていん？がー！

【あらすじ】

どうも、元ていんがです。

色々な不都合により、前IDからのログインができなくなったので
こうして新しいIDを作ることになりました。

それとこの話は未知による不条理に基づく存無し（ワールドレス）のお話の内容に少し手直しを加えた上で前作のPROLOGUEから更新していきます。

ですので前作の未知による不条理に基づく存無し（ワールドレス）のお話を読んでいただいている皆さんもこちらのほうをお読みください。

こんなことになってしまいましたが応援のほうをよろしく願います。

第零話『君の正体について』

【ここは、どこだ？】

俺は生暖かい液体に包まれてる中、意識を開いた。

目を開けようとしても開けることができず、体もうまく動かせなかった。

俺は何がどうなっているか理解できずにいると

「レガ…アナタ…コビ…ラバ…ハ、ソノ…ヲミタ…シヨ
ウ…」

【グウウウウツッ!?!】

割れるような痛みが頭を襲うと同時に断片的に誰かの声が頭の中に響いてきた。

《おやおや、もう『それ』がきてるのか。気の毒だね。》

【…誰…だ？…】

痛みに悶えていると、頭の中にさっきの声とは違う声が聞こえてきた。

《これは失礼した。私は世界を司り、管理をする者。》

【…神…様？…】

《ああ、そうか。君はまだ産まれていないからまだ知識はないんだったね。仕方ない、君に教えなければならぬことがあるが、それは君がもう少し大きくなってから言おうとしよう。ああ、そうだ。最後にひとつ、これを忘れないかどうかはわからないが、君の正体について教えよう。》

【…俺の……正体？…】

《そつだ。君は普通ノーマルでも特別スペシャルでも異常アブノーマルでも過負荷マイナスでもなく、まして
や悪平等ノットイコールでもない。》

君は

ワールドレス
無存現だ。》

【俺は…無存現？
ワールドレス】

《そつだ。君は…ああ、もうこんな時間か。悪いが、君はもうすぐ
産まれる。せいぜい頑張りたまえ。》

【ちょっと待てっ！無存現ワールドレスとは何なんだ！？】

《もう時間がないから詳しくは言えないが、無存現ワールドレスは存在するはずのないものだ。》

そう声が言い終わるかどうかの瞬間

俺は後ろの壁に押し出され、そのまま狭くも暖かい道を通ると

さっきよりも広い空間に出たと同時にたくさんの声が聞こえてきた。

第一話『君をほっておけなかったから』（前書き）

更新遅れてすみません（T—T）

次は検定試験があるので更新は12月の中旬ぐらいになります…

ちよっ！？マジだよ、マジー！

第一話『君をほっておけなかったから』

「はあ〜。」

まだ昏下がりのあまり人気のない公園のベンチにて銀髪のウルフカ
ツトの少年
おこがえり はがり
御幸返芳賀裏2才はため息をついていた。

普通、人気のない公園で幼い子供がため息をついていたら、
友達がいらないから寂しい、親が構ってくれないから寂しいなど、何
かしらの悩みを抱えているのだろうと思うが、彼には友達がい
ないどころかたくさんいて、両親も彼にたくさん愛情を注いでもら
い、何不自由ない生活を送っている。

では彼はどんな悩みを抱えているのか。

それは

『思い通り』になるからだ。

昔から彼の周りには不思議なことが起こった。

彼が今日の晩御飯はハンバーグが食べたいと思えばその日の晩御飯にハンバーグが出たり、友達が欲しいと思うと自然と友達ができたり、もっと親に構って欲しいと思うとその日から彼の親はより一層彼に愛情を注いだ。

彼は最初は嬉しく思ったが、だんだんと自分の『思い通り』になることにつまらなさを感じていった。

自分が何かを願うとその通りになる。

『思い通り』に願わずにいようと思ったことは何度かあった。

しかし、芳賀裏はそれを実行出来なかった。

それを防ぐにはみんなと同じじゃなくちゃならない
みんなと違ってはならない
みんなより突き出てはならない

だから、芳賀裏は一人ぼっちにならないためにみんなと同じ普通ノーマルを
演じて演じて演じ続けた。

それを続けていく内に芳賀裏は本当の自分の気持ちを出すことを忘
れ、心に思うことすら忘れてしまい、
いつしか上っ面の気持ち（うそ）と無感情だけが残った。

しかし、そこから変わりたいという気持ち（ほんとう）が上辺うへまじ
りにも浮き出たこともある。

しかしその反面、諦めて思い通り（このまま）でもいいとも上辺うへま
じりに芽生えてきていた。

そう……

これからの人生は思った通りのものだけにしかないだろう。

まだ幼い彼はそう結論づけ

思った通りに友達と遊んで、
思った通りに親に愛情を注いでもらい、
思った通りに思い通りの何の奇跡も変哲もない日々を繰り返して
いた。

「……………帰るか。」

そう呟くと芳賀裏はベンチから立ち上がって、帰ろうと歩き始める。

が、その瞬間。

「気持ち悪いんだよっ！……！」

ガッ！！

芳賀裏が公園から立ち去ろうとした時、公園の奥側から罵声と共に硬いものが何かにあたった音が聞こえた。

この音に芳賀裏は歩を止めたのだが

芳賀裏は正義心や心配に思っ止まった訳ではない。

ただ

期待したからだ

芳賀裏は今の生活（思い通り）そのものが変わることはどうせない、とすでに諦めていたが、この苦しみ（思い通り）をほんの一瞬でも和らげられたら、とこの先の出来事に淡く期待を寄せた。

芳賀裏が罵声が聞こえてきた場所に駆けつけると

そこには芳賀裏より年上らしい少年達数人が芳賀裏と同年代である少女を囲んで少女に石を投げつけていた。

少女はうずくまっていたので顔はわからなかったが、毒々しい赤いリボンのついたふわふわとした短いピンクの髪はリボンごと砂と埃にまみれ、身に付けている可愛らしいワンピースも同様に汚れており、さらに透きとおるように白い肌は至るところにあざがあり、血も流れているところを見ると石を投げつけられていただけでなく悲惨な暴行を受けていたのだろう。

すると少年達の内の一人が芳賀裏に気付いた。

「何だよ、お前？」

そう言われると芳賀裏は無表情のまま

「俺は御幸返芳賀裏だ。
おこがえり はがり

お前ら、その子に何してる？」

とだけ返した。

「あ？こいつが『化物』だからに決まってるだろ？」

ピキッ

「……………化物……………」

「そうだ、こいつが同じ場所にいるだけで吐き気がする！それにこいつが手で触ったら何でも腐っちまうから気持ち悪すぎるんだよ！！」
そのために俺達は『化物』退治をしてるのさ！！
こんな風になっつー！！！！」

そう言うと同時に先程までしゃべっていた少年は少女に向かって手に持っていた石をおもいきり投げつける。
石は少女の頭に当たり、少女の頭からはドロリと赤い血が出て、少女は小さく「うっつ…。」とうめいた。

ピキッピシッ

パキンッ

「おい」

その瞬間、芳賀裏の周りの空気が変わった。

「!?!? な、なんだよ?」

少年達は突然、芳賀裏のまとう雰囲気が変わったことにたじろいだ。

先程までは自分達より明らかに年下のただの少年だったはずだ。

だが、今の芳賀裏はさつきとはまるで違う。

殺伐なんてものじゃない、とてもおぞましく得体の知れないにか
だった。

「気持ち悪いからなんだよ、触ったら腐るから何だ。確かにその子
はただの人間じゃないかもしれない。だがなあ、その子もお前らも
同じ人間だろうがっ!!」

「うっ…うるせえっ! だからなんだってんだよお…。」

芳賀裏の気迫に押されるが、少年達は虚勢を張りつつも突き返した。

「お前らは少し違うからといってその子を『化物』呼ばわりしただけじゃなく、酷いことまでした。だから

【そのここにあやまれ
そしてにどとすがたをみせるな】

ゾクゾクゾクツツッ！！！

「「「ツツツ！……」」」
「「「めんなさいッ！……」」」
「「「」」」

少年達は少女に謝罪をしたと同時にものすごい勢いで公園から逃げ出していった。

「ふう…とりあえず、大丈夫か？」

芳賀裏は無感情な声に戻りながらも倒れている少女に優しく手を差し伸べた。

「え！？……あ…ああ、うん…」

少女はさっきの出来事とのギャップに驚きつつもゆっくり顔を上げた。

さっきまでは俯いていて見えなかったが、少女の顔はまるで人形のように可愛らしい、

しかし少女の目はどろどろに腐っているかのように虚ろであった。

そして少女が芳賀裏が差し伸べた手をとった。

その瞬間

グジュルルルッ

芳賀裏が差し伸べた手は腐り出していった。

「ひっ…いやあああああっ!!」

少女は自分に触れている芳賀裏の手が腐り出したことに気付いてすぐに芳賀裏の手を振りほどこうとしたが、芳賀裏は手を離すどころ

か、少女の手を強く握り返した。

数秒がたった時、芳賀裏は少女の手から離し

「大丈夫だよ、君の手はもうなにかを腐らせることはない。」

と言い放った。

「えっ？」

少女は芳賀裏の発言に驚きつつも、試しにさっき少女の頭に当たった石を持ってみると

石は腐ることはなく何も起こらなかった。

「えっ、でも、あなたの手は……………!？」

自分が石に触っても腐らなかったことに驚愕しつつも少女は腐って
るはずの芳賀裏の手を見た瞬間、

言葉を失った

腐ってるはずの芳賀裏の手が
いつの間にか元に戻っていたのだ。

「……………どうして……………どうして、腐らせることしかできない腐ったあた
しのために……………」までしてくれるの……………」

「……………」

「……………」
「こんなみんなに迷惑をかけるあたしなんて死んだほうがいいのに
……………」
ねえ、何でよっ……………何でっ……………」

「ほっておけなかったから」

「……………え……………？」

「君をほっておけなかったから。
自分が望んだ能力ちからじゃないのに、その能力振り回されて不幸になる姿を見たくはなかったから。
…実際俺もこんな呪われた能力で『化物』扱いされたからな。
まあもつとも、『思い通り』にその扱いを無くしたんだがな…」

そう言った芳賀裏の目はさっきまでの無感情さはすでに無く強くそして優しいものであった。

その言葉を聞いて少女は目を潤わせ一気に泣き出した。

「……………う…うわああああんっ!…!」

「なっ!…どうした!?!とにかく落ち着け!」

突然泣き出した少女に芳賀裏は慌てながらも泣き止ませようとする。

「うつ…グスン…こんな…こんなあたしでも幸せになってもいいの…?」

それを聞いて芳賀裏は微笑みながら強く返した。

「ああ、もちろんだ!」

「グスン…ヒック…あ…ありがとう…」

「そっぴやまだ名前を聞いてなかったな。何て名前なんだ?」

少女は流れる涙を拭い

「怒江…あたしの名前は江迎怒江。あなたのお名前は?」

「俺か?俺の名前は御幸返芳賀裏。よろしくな、怒江!」

そう言われた芳賀裏の顔には以前の上辺うっせも無感情もない、
本当の本音の笑顔があった。

荒廃した腐花コフレシヤが消去されました。

《いやはや、まさか彼がこんなにも早く物語を変えらるとは驚いたな
あ。流石『二年前』から目をつけたことだけはある。》

一面が白そのものの空間に佇んでいる『男とも女ともとれるその者』
はティーカップに入った紅茶を一杯飲むと、嬉しそうに言う。

《まさか能力を使って過負荷マイナスを消すとはね。さっさと『代わり』を
用意しなくちゃね。》

『男とも女ともとれるその者』は目の前に浮かんでいるモニターの中から一人の少女を映すと手前にあるボタンを押した。

《これで良しと。早速手間を掛けさせられたけどその分、面白いものが見れたからいいか。

この先めんどくさいことが起きるかもしれないけど彼に働いてもらうのはもう少しあとになるかな。まあ、それまではこの神様を楽しませてくれよ

ワールドレス
無存現くん。》

そう言つて『男とも女ともとれるその者』もとい、神はティーポットでティーカップに紅茶を注ぎ、香りを楽しみつつゆっくり飲んでいった。

第一話『君をほっておけなかったから』（後書き）

???」「ふっふっふっ、

ついに…ついにきたのだな」

???」「この私、この小説の作者こと

ていん?がー!のコーナーが始まったのだー!…うわぁっはっはっ
はっはっはっ!…!…!…」

シーーーーーン

ていん?がー!」「……………」

ていん?がー!」「…よく考えたら一人でいたんだっただ…。」

ていん?がー!」「まあ、そんなことは置いて…!…」

ていん？がー！「この小説の前書きと後書きはていん？がー！ワールドなコーナーとして次話からスタートだ！！」

ていん？がー！「みんなー、この小説ともども応援よろしくなー！！
！（みんな応援してくれるかな……？）」

第二話『王子様…ありがとう』（前書き）

ていん？がー！」「はいっ、

第一回、『ていん？がー！のワールドン…！』『はっじまってるよ
…！』」

芳賀裏「（ダサッ。）」

怒江「（早くお家に帰りたい。）」

ていん？がー！」「よし！早速トークから始めるぜ！」

芳賀裏「おいちよつと待てよ、クソ作者」

ていん？がー！」「ん？なんだい、我らが主人公くん？」「ニヤニヤ

芳賀裏「（うわ、うぜえ）何で俺達がここにいるんだよ？」

ていん？がー！」「えーっと、ほらっこの企画書に
『このコーナーは作者であるていん？がー！とパートナーが進めま
す。』
って書いてあるだろ！」「バンバン

ていん？がー！」「さあ、どういうトークをしていこうかな　！！
恥ずかしい話？武勇伝？それとも深い話かな　！！！！」

芳賀裏「（キモッ）」

怒江「（怖い…）」

ていん？がー！」「さあ、どんなどんなどんな話しようかな
「……！！」

????「待ちたまえ！」

ていん？がー！「だ、誰だ！？」

後書きに続く。

第二話『王子様…ありがとう』

わたし、江迎怒江は不幸でした。

生まれつき持ったこの能力ちからのせいでわたしの人生はひどく腐り廃れたものになりました。

わたしの手で触ったものはぜんぶ腐りました。

かわいいわんちゃんを抱いたらわんちゃんは腐って死にかわいいねこちゃんを撫でたらねこちゃんは腐って死にお人形さんを持ったらお人形さんは腐って無くなりました。

この能力ちからのせいでたくさんのはわたしを怖がり、蔑み、虐げました。

でもおとうさんとおかあさんだけは、怒江の病気は必ず治るから大丈夫だよ、と言ってわたしをたくさん病院に連れていきました。

けど、どの病院に行っても原因はわからないと言われて治すことは
できませんでした。

この能力ひきが治なることはないのかなあ

ある日、おかあさんはわたしをある病院に連れていきました。

その病院は異常な子どもを診察していてここならわたしの病気がわ
かるかもしれない、とおかあさんは言っていました。正直もうどう
でもよく思いました。

わたしはいままでたくさんのものを腐らせてきた。

今さらこの能力能力がわかっててもわたしが腐らせてきたものは元に戻るわけでも、わたしがしてきたことが償われるわけでもない。

わたしは人に迷惑な存在。

わたしが何かに触った数だけ腐って廃れて死んで無くなった。

いつかわたしはおとうさんとおかあさんを腐らせて無くすかもしれない。

わたしはいちやいけいないんだ

幸せになっちゃいけないんだ。

生きてちゃいけないんだ。

もう死んだほうがいいのかなあ。

異常な子どもが集まるその病院で、わたしは白衣を着たわたしとおなじくらいの先生(?)に診てもらいました。

その先生が言うにはわたしの能力は過負荷ひきょうかという欠点マイナスにしかならな
いものだそうです。

ああ、やっぱりわたしは迷惑な存在だったんだなあ。

毎日が腐っていたわたしでもほんの少し希望をもっていました。

それは、運命の出会いです。

前におかあさんに読んでもらった絵本に、ある日一人の女の子の前に白馬の王子様がやってきてその女の子を幸せにした、とありました。

もしかしたら白馬の王子様がわたしを救ってくれるかもしれない、と腐った希望を持ち

白馬の王子様に出会うためにわたしは毎日外に出ました。

しかし、わたしを待っていたのは運命的な出会い（ゆめ）ではなく腐り落ちた現実じしやくでした。

わたしが道を歩いているとたくさんの方はわたしを怖がってわたしを避け、離れていきます。

そしてわたしと同じぐらいの子たちはわたしをいじめます。

最初の頃は無視したり避けられていましたが
次第には砂や泥、石を投げられたり、殴る蹴るも当たり前になって
いました。

また、大人もわたしをいじめてきます。

大人は自分の子どもをわたしから遠ざけたり、わたしのお家の悪口もたくさん言ってきました。

そして最近になってからはわたしのお家にいっぱい落書きがされたりゴミを投げ込まれます。

そうなってしまったのはわたしのせいだと泣いていたとき
おとうさんとおかあさんは、怒江は何も悪くない。今は悪くてもいつかきつと幸せが来るよ、とわたしを抱きながら言っていました。

こんなわたしが幸せになれるのかなあ

ある日、いつもよりいっぱい外を歩いていると知らない公園に着きました。

公園の中に入ると、わたしより少し大きな男の子達が楽しそうにボールで遊んでいました。

わたしがそれを観ていると、ボールがわたしのところに転がってきました。

それに気づいた男の子達は嫌そうな顔をしつつも、早くボールをこちに投げてくれ、と言ってきました。

この時、わたしは男の子達がわたしを避けなかったことが嬉しくて、^{マイナス}過負荷のことは頭にありませんでした。

そして、わたしが男の子達に投げ返すためにボールを拾おうとしま

した。

でも、

ゲジュルルルッ

ボールはグズグズに腐ってなくなりました。

「うわぁ！！ボールが腐った!？」

「おい、もしかしてあいつ噂のあれじゃ…」

「ひっ…化物!！」

それを見た男の子達はわたしを怖がり、いじめてきました。

今日は殴ったり蹴ったりだけじゃなく滑り台やブランコにぶつけられて血がいつぱい出ていました。

あの時ボールを拾わなかったら、と腐った後悔をしました。

そして男の子達はついに石を持ち出してわたしに投げてきました。

「気持ち悪いんだよっ!!」

ビュッ

ガッ!

いつそ、このまま石を投げられ続けたら死ねるのかなあ
なんて腐った考えをしていると

男の子達が投げる石が急に止まり

「何だよ、お前？」

と、言ったのが聞こえました。

どうやら、わたし達以外の誰かが来たようです。

すると向こうは男の子達に対して、

「俺は御幸返芳賀裏だ。おこがえり はがり

お前ら、その子に何してる？」

とだけ返しました。

わたしは地面に倒れていたので姿は見えませんでした。その声から判するにその男の子はわたしを助けにきたのかなあと思いました。何か違和感を感じました。

空っぽ

その男の子の声は、端から聞いたらわたしを心配してくれるようだ
けど

その声には喜びも怒りも楽しさも悲しみも愛しさも優しさも怖さも
憎しみも何もない

ただ無機質で機械のような音が流れたような感じでした。

「あ？こいつが『化物』だからに決まってるだろ？」

ピキッ

「……………化物……………」

……………え？

今…少しだけ雰囲気が変わった……？

「そうだ、こいつが同じ場所にいるだけで吐き気がする！それにこいつが手で触ったら何でも腐っちまうから気持ち悪すぎんだよつ！！
そのために俺達は『化物』退治をしてるのさ！！
こんな風になつっ！！！！」

そう言った時、わたしの頭に硬い石が当たり、頭から血が出てきました。

ピキッピシッ

パキンッ

「おい」

わたしに石が当たった時、その男の子からとてもおぞましい『何か』を感じました。

その『何か』にわたしは息をするのを忘れるぐらい怯えていました。

「!?!? な、なんだよ?」

男の子達も凄んではいるもの、声はとても震えていました。

「気持ち悪いからなんだよ、触ったら腐るから何だ。確かにその子はただの人間じゃないかもしれない。だがなあ、その子もお前らも同じ人間だろうがっ!?!」

え!!今なんて…

「うっ…うるせえっ!だからなんだってんだよお…。」

「お前らは少し違うからといってその子を『化物』呼ばわりしただけじゃなく、酷いことまでした。だから」

【そのこにあやまれ
そしてにととすがたをみせるな】

ゾクゾクゾクッッッ！！！

その男の子の最後の言葉は今でも頭にこびりつくぐらいにおぞましく残りました。

もはやどんな言葉でも表せないぐらいに……

「「ッ！……」、「ごめんなさいッ！」「」

わたしをいじめていた男の子達はその言葉通りに去っていったようです。

「ふう……とりあえず、大丈夫か？」

「え！？……あ……ああ、うん……」

男の子が急に無機質な声に戻ったので少し驚きつつもわたしは顔を上げました。

その男の子は少し白みがかった銀色の髪にかっこいい顔をしていてわたしを心配しているようでしたが、男の子の目の奥は声と同じ空っぽで何も映ってないみたいでした。

そしてすぐに男の子はわたしの手を取りました。

しかし

グジュルルルッ

その男の子が差し伸べた手は腐り出しました。

「ひっ…いやあああああっ!!」

そんな…

いやだ、わたしを助けてくれたのに…

わたしはその男の子の手を振りほどこうとしましたが、その男の子は手を離すどころか、わたしの手を強く握り返しました。

そしてすぐに男の子はわたしの手を離し

「大丈夫だよ、君の手はもつなにかを腐らせることはない。」

と言いました。

「えっ?」

わたしは最初は男の子が言ったことがわかりませんでした。

でも、さっきわたしの頭に当たった石を持ってみると石には何の変
化もありませんでした。

「えっ、でも、あなたの手は……!?!」

石が腐らなくても男の子の手はもつ……

わたしが男の子の手を見た瞬間、
言葉を失いました。

なぜなら、腐ってるはずの男の子の手はいつの間にか元に戻って
いたから。

まだ二年しか生きてませんが、ここまで現実離れたことは初めて
見ました。

でもなんでこの男の子はわたしのためにここまでしてくれるの…？

「…どうして…どうして、腐らせることしかできない腐ったわた
しのために…ここまでしてくれるの…？」

「……………」

わたしは期待してるかもしれない。

「こんな、みんなに迷惑をかけるわたしなんて死んだほうがいいの
に……………」
ねえ、何でよっ！！……………何でっ……………」

この人が白馬の王子様なんじゃないなって

「ほっておけなかったから」

「……………え……………？」

「君をほっておけなかったから。」

自分が望んだ能力ちからじゃないのに、その能力ちからに振り回されて不幸になる姿を見たくはなかったから。

…実際、俺もこんな呪われた能力ちからで『化物』扱いされたからな。まあもつとも、『思い通り』にその扱いを無くしたんだがな…」

その言葉を聞いた時、わたしの心に腐り積もっていた呪縛が一気に崩壊しました。

「……う…うわああああんっ!!」

わたしは泣いていました。
泣いて泣いて泣いて
疲れても泣いてました。

「なっ!どうした!?!とにかく落ち着け!」

「うっ…グスン…こんな…こんなあたしでも幸せになってもいいの…?」

わたしはまだ心に残っていた不安を出しました。

幸せになってもまた、人に迷惑をかけるのではないかと。

男の子はそれを聞いて微笑みながら

「ああ、もちろんだ！」
と、言いました。

そう言った男の子の目はさっきまでの空っぽではなく、とても強く優しいものでした。

「グスン…ヒック…あ…ありがとうございます…」

わたしはここまで温もりをもらったのは初めてかもしれません。

王子様…ありがとうございます。

「そういわまだ名前を聞いてなかったな。何て名前なんだ？」

すると、男の子は忘れていたのか、わたしの名前を聞いてきました。

「怒江…あたしの名前は江迎怒江。あなたのお名前は？」

あたしも男の子の名前を聞いてみました。

だってこの先もずっと会いたいから…／＼

「俺か？改めまして俺の名前は御幸返芳賀裏。よろしくな、怒江。」

わたし、江迎怒江は不幸でした。

しかし、これからは不幸じゃありません。

ある人との出会いがわたしを不幸から救ってくれたから。
ある人との出会いがわたしに温もりをあたえてくれたから。

6月24日

わたしはこの日を永遠に忘れないでしょう。

なぜなら、その日はわたしの運命が変わった日でわたしの初恋の日だから…

ありがとう…そして、大好きだよ芳賀裏くん。

第二話『王子様…ありがとう』（後書き）

ていん？がー！「だ、誰だ！！お前は！！？」

「……」ああ、改めて、第零話に出てきた神様だ。」

神様「ちなみにこのコーナーのパートナーは私のことだよ。
よろしくね。」

ていん？がー！」「

芳賀裏「あっ、もう時間だから家に帰るわ」

怒江「ばいばーい」

神様「さてと、早速このコーナーを始めようじゃないか。

ん？」

ていん？がー！」

神様「ああ、この状態では今回は無理だね。
次回からになるか。」

神様「それじゃあ、次回もこの小説をよろしく。」

第三話『プライベートまでないようだ』（前書き）

ていん？がー！……………」ズーン

神様「まあ、いい加減早く立ち直りたまえよ。くよくよしても仕方ないだろう？」

ていん？がー！……………」

神様「ん？」

ていん？がー！「うるせえ……………！！俺だってなあ、他の小説みたいに主人公達とわいわいがやがや舞台裏トークしたかったよコンチクシヨ……………！！！！」

神様「ふむ、なるほどね。

要するに、他の小説では舞台裏トークがあるのに自分だけ舞台裏トークができなかったということだ。

それはさぞかし辛かったろうに、でも、もう心配しなくていいよ。」

ニコッ

ていん？がー！」「か、神さん…」「ブワッ

神様「早速このコーナーを美味しい紅茶の入れ方コーナーとして始めよう。」

ていん？がー！」「あんた話聞いてたかあああああ
！！？」「

第三話『プライベートまでないようだ』

い、いま起こっていることをありのままに話すぜ

俺こと御幸返芳賀裏は未知の局面に遭遇している

こんなことが起こるなんて知らなかったし、思いもしなかったんだ

だが、気づいたら『それ』はすでに起こっていたんだよ!!

と、とりあえず今の状況を整理しよう

?俺は自分の部屋で寝ていた。

？目が覚めた。

今ここだよ！　？隣を見ると怒江がいて、「はーくん、おはよ〜。」
とあいさつをしてきた。

ということなんだが、俺はあいさつよりも先に言いたいことがある。

「なんつで俺の部屋にいるんだ

！！！！

っ…ていうか、それ以前にどうやって俺の家に来た！？

お前に家の場所教えた覚えないぞ！！？」

「え〜？それはあ、はーくんが大好きだからだよお。」

あれっ？

この子こんなに会話が成立しない娘だったっけ？

いずれにせよ、早く怒江を部屋から出さねば着替えもできん

そう考えている内に助け船がでたのか、母さんがドアを開けて俺の部屋に入ってきた。

「あつ、母s」あら〜、怒江ちゃん。芳賀裏を起こしてくれたのね〜。ありがとう〜。」

「いえ、お義母様。未来の妻たるものが夫の世話をするのは当たり前です。」

「うふふ、それもそうねえ。怒江ちゃん、これからも芳賀裏のことよろしくね。」

「『これからも芳賀裏のことよろしくね。』ですって…。それって、わたしとはーくんとの将来が約束されたってことなのね。つまり、わたしははーくんの許嫁になったわ。お義母様うれしいわ。さて、そうなったら、はーくんが自慢できる最高のお嫁さんになるために早く花嫁修業しなくちゃね。そうと決まればまずは、はーくんの口に合うごはんを作るために料理から始めるわ。お義母様、わたしに料理のことを教えてください。」

「あらあら〜。」

…なんで、母さんが怒江と仲良いんだ？

いやっ！

というか、怒江が勝手に俺の部屋に入ってきてるのはスルーかよ！？

「母さん、なんで勝手に怒江を俺の部屋に入れてんだよ！

というか、何で怒江が家の場所を知ってるんだ！！？」

「あら、それはねえ、この前お母さんが買い物しに出かけてたらあなたが前に話してた怒江ちゃんに会ってねえ」。

わたし達の家に行きたがってたから、買い物その後家に連れて来たのよ。それに礼儀正しくて良い子だから何回か家でお茶してるの。

よかったわねえ、芳賀裏。

こんなにかわいいお友達が家に来てくれて」

「やだ、お義母様ったらあ」。

アハハハハハハハ

…どうやら話が通じないだけじゃなく、プライバシーまでないよう
だ。

ああ、なんだか頭が痛くなってきた……。

ところ変わってそのあと、俺は怒江と外で遊ぶことになった。

俺は怒江を追い出そうとしたが、母さんが、「若い内にこんなにか
わいい子とデートしないと、損よ!」とこれまたややこしいことを
言っし、怒江は一緒に遊ぼうオーラを出すので今に至るのである。

「わあ、はーくんみてみてー!」

ねこちゃんがいるよ〜」

俺達が道を歩いていると道の端に猫が寝転んでいた。

怒江はとてとと猫の方に向かい、猫を抱き上げた。

すると、怒江は無事に抱き上げられたのが嬉しかったのかさらに喜んでいた。

「はーくん、このねこちゃんかわいいね〜」

「あ、ああ、そうだな。」

この猫ふてぶてしい顔してるし、結構ふとってるぞ。
というか、怒江よく抱き上げれたな…。

そんなことを思いつつも、気付けば俺は楽しそうに笑っていた。

上辺^{うっぺ}じゃなく心からだ。

こんなに心から楽しいのは初めてかもしれない。
こんなに心から笑ったのは初めてかもしれない。

あんな『思い通り』の人生にはなんにもなかったからな…

それに、怒江も本当に楽しそうに笑っている。

毎日がどたばたで躊躇なくプライバシーまで破られる日々だが、

…まあ…悪くはない…かな。

俺はそう思いつつ、怒江が抱いている猫の頭を撫でた。

第三話『プライベートまでないようだ』（後書き）

ていん？がー！」「ゼーハー…ゼーハー…。」

神様「全く…何だね、せつかく私が用意した美味しい紅茶1000セット（ティーパック、ティーカップ、ティーポットそれぞれ100個ずつ）を片付けるなんて。」

ていん？がー！」「いや完全にあんたの趣味じゃん!？」

神様「はあ…私はだね、他にはない斬新なコーナーを作りたいんだよ。」

ていん？がー！」「そんなこと言ってもなあ…。」

神様「それより、さっきから否定するだけで君は何かあるのかね?」

ていん？がー！」「う…いや…俺はただトークを…」

神様「それだと読者が飽きてしまうからこうして新しいコーナーを考えているのだよ、言ってることがわかるかい？」

ていん？がー！」「うん…」

神様「返事は、はい」

ていん？がー！」「…はい」

神様「いいかい、ありがちなコーナーをやるだけでは読者は飽きてしまう。さっきの紅茶のように、まず誰もがやらないようなことを始めることが大切なんだ。つまりは、初めは拒絶されるが辛抱づよく、そして工夫を続ければそれだけ読者の心をウンヌン…」「ペラペラクドクド

ていん？がー！」「……………」「セイザサセラレテイル

このあと一周まわって舞台裏トークをやることになりました。

第四話『むしろ嬉しい』（前書き）

ていん？がー！「ていん？がー！プレゼント！クリスマスだよ、俺
最スペシャル〜！！！」パチパチパチ

神様「わー」パチパチパチ

神様「と、これは置いといて質問いいかい？」

ていん？がー！「ん、何すか？」

神様「クリスマスはもう過ぎてるし、もうすぐ正月だろう？」

ていん？がー！「」

ていん？がー！「ていん？がー！プレゼント！クリスマスと正月だ
よ、俺最スペシャル〜！！！」

神様「流したね……」

ていん？がー！「さて！この企画ですが、今日から何と毎日この小説を投稿するていん？がー！のクリスマスプレゼントかつお年玉なのだ……！」バ　　ン

神様「：まあ、クリスマスにしても正月にしてもシヨボイが今までの更新頻度から考えるとまだマシか」

ていん？がー！「そつでしょ！では時間もないのでござ……！」

第四話『むしろ嬉しい』

春爛漫の季節

桜の花が舞い散る今日この頃

世間では入学式などの行事で賑わっている中、その波に乗り掛かる
うとする子供が二人いた。

「はーくん、はやくはやく」

「ちよつ、待てよ怒江！幼稚園の入園式までまだ二時間もあるから
ゆっくり準備させてよ！ていうか、当然のように勝手に俺の部屋に
上がり込むなよ！！これはもう完全な不法侵入だぞ！！！！
せめて玄関で待っとけよ！」

そう、実はこの二人はもう三才になったので、今日幼稚園に入園することになったのだ。

もともと芳賀裏には友達がいたとはいえ、それは『思った通り』のものだったため、幼稚園では『思った通り』ではない新たな出会いにわくわくしており

一方、怒江はというと、自分の過負荷マイナスにより人との関係が持てなかった為、幼稚園で芳賀裏以外の子供と遊ぶのが楽しみで仕方がなかった。

だからこの二人は今日の入園式をとても楽しみにしていたのだ。

「さあ、みなさん」

まずは自分のお名前を言っていきましょうね」

「「「「は

い！」「」「」

「…ああ、なんだか緊張してきたなあ。」

実際芳賀裏はこういった場には初めて立つので、緊張してしようがなかった。

だが、そうこうしているうちに順番が芳賀裏のところまできた。

「えー、おこがえりはがりです。

よろしくな。」

「あたしはえむかえむかえです！
みんなよろしくね」

「わ…わたしのなまえはおにがせはりがねです。
よ、よろしくおねがいます。」

「ぼくのなまえはひとよしせんきちだよ
よろしくね」！

「私の名は黒神めだかだ。
よろしく頼むぞ。」

……ん？

なんか、幼稚園児ではまずありえないような紹介が聞こえたぞ

その声がした方を見てみると

紫色のおかつぱだが将来は絶対的な美人になるぐらいに整った顔を
した少女がいた。

だが少女が放つオーラ？はもう上から目線というか、無意識という
か必然的に人の上に立っているようだった。

・お絵かき

先生「あらあ、善吉くんは何を書いているのかな？」

善吉「ん〜とね、ワンちゃん！」

先生「まあかわいいわねえ。

針金ちゃんは何を書
いてるのかな？」

針金「え、えっと、お巡りさんです！」

先生「あらあらお上手〜

針金ちゃんは大きくなったらお巡りさんになりたいのかな？」

針金「はい！お巡りさんになって悪い人を捕まえます！」

先生「針金ちゃんなら絶対なれるわよ

…それでめだかちゃんは何を書いているのかな？」

めだか「うむ、好きなものと言われたから私は七福神を書いたぞ！」

先生「（なんで！？）へ、へえ…なんでめだかちゃんは七福神が好きなのかな？」

めだか「それはだな、私は七福神の中で特に福祿寿と寿老人が好きでな、道教を強く追求したと言われていて私は道教の考えが興味深いものだから好きだ。ちなみに福祿寿と寿老人は同一人物という説があつてな…」

針金「ながすぎですよ！！！」

・お昼休み

女子A「ねえねえ、むかえちゃんのおべんとつみせて」

怒江「うん、いいよ！」

女子B「わっ、かわいい〜」

怒江「これ、わたし一人で作ったんだよ」

女子A「えっ、すごいじゃん！」

女子B「むかえちゃん、このたまごやきとたこさんウインナーごうかんしょ」

怒江「ダメッ！！！」

女子A B「ビクッ

怒江「このお弁当はわたしはーくんの愛の結晶なんだよ！だから
はーくん以外が食べるなんて許せないよ。この卵焼きは九州の宮崎
県まで行って取った特産地鶏の卵から作ったのよ。ふふっ、わたし
が一生懸命作ったお弁当をはーくんが食べないはずないわ。さあ、
はーくん一緒にお弁当食べましょう。」

芳賀裏「（見つかったらやられる見つかったらやられる見つかったら
やられる見つかったらやられる見つかったらやられる見つかったら
やられる）」ガクガクガクガク

「さあ、みなさーん！

最後は鬼「っ」をして遊びましょっねっ〜!」

「「「「「「は い!~!~!」「「「「「「

先生はそう言つとくじ引きを取り出し、みんなにくじを引かせた。

ちなみにくじの結果は

俺、善吉、針金、あと他三名が鬼で、それ以外（20人ぐらいかな？）が逃げる役になった。

「き、きょうはよろしくおねがいます。ひとよしくん、おこがえりくん。」

「まあ、そんなに硬くなるなって
気楽に楽しんでいっつぜ、針金」

「は、はい！」

「針金ちゃん、よろしくねー」

俺たちが少し話している間に鬼ごっこは始まった。

開始から約2分

20人近くいた園児たちはめだか、怒江、その他二人を除いたほぼ全ての園児を芳賀裏一人が捕まえた。

元々芳賀裏は『思い通り』にしていたとはいえ、運動神経や頭脳面は同級生のそれを遥かに越えていた。

さらに目を重ねることにその才能は^{スベック}どんどん上がってきていて大人も目を見張るものになってきている。

この結果から芳賀裏はまた『思い通り』を思い出してしまった。

鬼役の善吉や針金は

「はがりくん、すーじーいー!」

「す、すーじーいーです!」

と素直に芳賀裏を誉めていて他の園児たちも誉めていたが

芳賀裏にとっては『つまらない』ものでしかなかった

少なくとも他の園児よりは張り合いのあるものがいれば、と思いつつも芳賀裏は怒江とその他二人を捕まえて残るは黒神めだかただ一人となった。

ああ、こいつもすぐに捕まえて終わりになるだろう、と芳賀裏は残念に思った。

事実、黒神めだかと芳賀裏の距離は1メートルもなかった。

所詮こいつも他のやつらと同じなのか、とため息を吐くと、芳賀裏はめだかを捕まえるために手を伸ばした。

だが

!!!!!!!!!!

俺はあるはずの感触を確かめたが、それはいつまでたってもこなかった。

手を伸ばした先を見ると黒神めだかはどこにもいなかった

どこにいった…？

やつを探すために後ろを振り替えると、俺は目を見張った。

なんと黒神めだかはすでに5メートルも離れたところにいたのだ。

「お前…何をした？」

「なあと、貴様が手を伸ばした瞬間、体を捻らせて走っただけだ。」

と黒神めだかは背景に凜！とつくぐらいに清々しく答えやがった

簡単に言ったが、そんなもの普通の幼稚園児ができるはずはない、いや、できてはならない。

だが

そうこなくっちゃ楽しくないぜ

鬼ごっこもあと残り5分となったが、依然として芳賀裏がめだかを
追い回していた

その光景はもう追い回すよりも
芳賀裏の攻撃にめだかが避け続けているという感じだった。

そして周りはどうと

「はがりくん、がんばれー！」

「めだかちゃんもまけるな！」

「二人とも頑張ってくださいー！」

と、園児だけでなく先生も二人を応援していた。

「やっぱりはーくんもすごいけど、あのめだかちゃんって子もすごいねえ。」

「うん！めだかちゃんは何でもできるんだよ！」

「ふうん、でも勝つのはやっぱりはーくんかなあ。」

「そお？めだかちゃんも負けないと思うよお？」

「んー、見てたらわかるよお。」

まさか、ここまでやるとはな

やはり、あの雰囲気は伊達じゃなかったってことか

『思い通り』を壊してくれて感謝するぜ、黒神めだか

いや、めだか

俺は礼をもって次で終わらせる！

その瞬間、芳賀裏はめだかとの距離を一気に詰めた。

めだかはすぐに避ける体制にはいったが

!!!!!!

めだかを捕まえようとしていた芳賀裏が消えたのだ

めだかは芳賀裏を探すために後ろを振り替えるうとした

が

「ここだよ」

その声と同時にめだかの肩に手が置かれた。

めだかがそのまま振り替えると

そこには消えたはずの芳賀裏がいた。

「貴様、どうやって姿を消した？」

「いやあ、消えるもなにもただ俺は『お前のまね』をして後ろにまわっただけだよ。」

その瞬間、黒神めだかの本能は悟った。

この男は私と同じ、いや、私以上だ

だが、悔しくはなく、むしろ嬉しい。

自分を負かせるものが現れたから

「これからもよろしくな、めだか」

「ああ、「こちらこそよろしく、芳賀裏」

二人は互いにかっちりと握手をした。

次の日から怒江に加えてめだかと善吉と遊ぶようになったが、

「あなたたちをほっておくと、なにかやらかす気がします！」

なぜか針金もついてくるようになったのである。

第四話『むしろ嬉しい』（後書き）

ていん？がー！「さあ、今回四話に登場した鬼瀬針金ちゃんです！」「パチパチパチ

針金」ど、どうもです」

神様「ちよつと、ちよつと待ちたまえ」

ていん？がー！「も、何すか？」

神様「なぜ勝手にゲストを登場させている？」

ていん？がー！「え？そりゃあスタッフが用意したからでしょ？ADそうでしょ！」

A D「チガイマスチガイマス

ていん？がー！」「マ、マジか！？」

まあ、そんな固いこと言わずに熱く語り合おうぜ！針金ちゃん
ウデワキワキ

針金「ひ…た、たすけて」

神様「ピッ、プルルルル

神様「もしもし、天界警察かい、私だ。

今スタジオに幼女を襲う変質者がいるのだがね、すぐこれるかい？
30秒でいけるのか。

え、抵抗したら？

もちろん発砲許可を出すよ、出来るだけすぐに来てね。「ピッ

第五話『幸せになりについて…』（前書き）

ていん？がー！」「ボロッ

神様「全く…。何かの間違いで来たとしてもくれぐれも『間違い』
だけは犯さないでくれよ。」

ていん？がー！」「は…はい…。」

神様「はあ…。おっと、もう休憩時間じゃないか。
早くしないと白組の長渕剛が始まってしまつ。

それじゃあていん？がー！くん、罰としての後の進行はよろしくね。
スタスタスタ

ていん？がー！」「えっ…ちよっ!？

…俺怪我人だし、ガキ使見たいんだけどなあ……………

それではVTR、ゴー！！（松っちゃんのまねで）「

スタッフ一同「（似てね）」

ていん？がー！「コラ　　！！

今失礼なこと考えただろ！！」

第五話『幸せになりについて…』

ぽかぽかと降り注ぐ5月ののどかな陽射し

窓の外に耳を澄ませると聞こえてくる鳥たちの豊かなさえずり

わたくし、御幸返芳賀裏は最高の目覚めを体験できそうです。

え？それはなぜかって？

はっはっはっ！

じゃあそんな君に特別に教えてあげよう！

それは

部屋のドアに内鍵（チェーン付き）をつけたからさ

！！

こうしておけば、もう怒江は俺の部屋にはもう勝手に入ってはこれ
まいー！！

ああ…最初からこうすればよかったじゃないか

ほんと…俺って…馬鹿……。

まあ何はともあれ俺のMorningはvery Goodにカット
ピンピングだぜー！！

「おお、起きたか芳賀利。今日は清々しい朝だな。」

「……ミナサン、カギヲカケタノニドウヤツテハイツテキタノデスカ？」

「うんっ！それはね　！めだかちゃんがぴっきんぐしたんだよ
！」

「うむ、あの程度の錠前は昔解いた20面ルービックキューブよりも簡単だったぞ。」

ふほうしんにゆうがあらわれた。

はがりはどつする？

・たたかう

・どつぐ　うちかぎ

・にげる

はがりはうちかぎをつかった。

はがりのぼうはんりよくがあがった。

ふほうしんにゆうはなかまをよんだ。

ピッキングがあらわれた。

ピッキングのこつげき。

はがりは999ダメージを受けた。

はがりはたおれた。

G A M E O V E R

「めだかの家に遊びにいくっ?」

「うんっ! そうだよ!」

「んゝ確かにめだかちゃんの家に行ったことないね」

「ブ、ブキブキします…」

「よし、それじゃあ私の家に行こうではないか！」

「いや、俺行くとは一言も言っただねえし！！」

「ブ」

「もしもし、すぐに入りを頼む。」

「……………はい？」

「お前今何て言った？」

「うむ、すぐにへりを頼む、と言ったぞ。」

.....はい？

そしてへりに乗ること30分

へりが目的地に降り立った。

周りを見るとそこは見渡すかぎりの雄大な平原が広がっており、め

だが曰く、庭の一部だそうだ。なんと恐ろしいことが

そして前を見てみるとそこにはもはや城と呼べるものが建っていた。

その城の前まで行くと、そこには途方もなく長いレッドカーペットと百人以上はいるであろう使用人さんとメイドさんが

「「「「「「お帰りなさいませ、お嬢様！」「」「」「」

と一斉に頭を下げた。

「それに対してめだかは「うむ、」苦勞。」と言い

悠然とレッドカーペットの上を歩いていった。

怒江、善吉、針金は目を輝かせていたが
俺はあまりの驚きの連続にポカンと突っ立っていた。

うん…現実ってなんなんだろう…

そんなこんなで俺達は城の中に入り、出迎えてくれたメイドさんの1人にめだかの部屋まで案内してもらった。

そこもやはり広く、俺の家がすっぽりと入るぐらい広かった。

ははっ、格差社会だね

それから俺たちはめだかの部屋で様々な遊びをした。

そこには、パズル、ジグソーパズル、将棋、チェス、オセロなどのおもちゃが数え切れないほどあり

俺たちが人生ゲームで遊んでいると

ドアのほうから、ドドドドドドッ、とものすごい音がして俺たちは何事かとドアのほうに耳を傾けた。

こっちまでいやになるぐらい嫌悪感丸出しのめだかを除いて…

すると程なくしてドアがバンツ！と開き、俺たちより少し大きくて腰まである紫色の髪で結構整った顔をした少年が

「めだかちゃ〜ん！！おかえ〜ん！！」グボアツ！！！！」

めだかに抱きつこうとしたが

めだかの殺意MAXパンチを見事に食らい、外の廊下の壁にめり込んだ。

113

その一部始終に怒江、針金は当然怯えて泣き出した。

めだかさん

幼稚園児にそんな「ピ

」なものを見せてはいかんよ。

俺は、同じあれを見ても全然平気だった善吉にさっきの少年が誰なのかを聞いてみた。

「さっきのひとはまぐるさんで、めだかちゃんのおにいさんだよ！」と元気いっぱいに答えた。

なるほど、あれがめだかの兄ちゃんかあ〜。

第一印象は色々残念な人だなマル

しばらくして怒江がトイレに行きたいと言ったが、この広大な城の

中で迷ってしまうかもしれないので俺が付き添うことになった。

……あれ？俺よりこの城に住んでるめだかが行ったほうがよくな
！！？

そう気付いた時にはすでに遅く、怒江がニコニコ笑いながら幼稚園
児とは思えないぐらいの力で俺の手を握っている。っていうか、爪
！爪食い込んでるって！？

そしてトイレを探しているのだが

やっぱり広いっ！……！

こんなに広いとマジで遭難するんじゃないか？

そう思いながら廊下を歩いているとほかとは明らかに違う扉を見つけた。

俺はそこがトイレだと信じてその扉を開けた。

しかし、そこはトイレではなく見渡す限りの本棚がある図書館がある空間だった。

俺と怒江がその光景に呆然としているとその部屋の奥で机に座った少女を見かけた。

俺たちはトイレのことを聞こうと少女の近くまで行くと、その少女は気付いたのか、こっちを振り向いた。

少女は紫色のショートヘアで目付きは悪いが、それを覆すほど整った顔を持っていた。

しかし、少女の手足には鎖が結び付けられており、さらに部屋には電気がついておらずに机の電気だけで勉強をしていて、周りにはおびただしい量の本や壊れたトロフィーや破れた賞状が転がっていて

それで彼女は異常だとわかった。
アブノーマル

すると少女は

「…何だ、てめえらは？」

とギスギスした口調で聞いてきた。

「俺の名前は御幸返芳賀裏、そしてこっちが江迎怒江、めだかの友達だ。お前の名前は何だ？」

「…黒神くじらだ。」

「何でお前はそんなに勉強してるんだ？」

「何でそんなに勉強するだあ？そんなの決まってるじゃねえか。天才になるためだよ！」

「たとえ天才になるにしてもそこまでする必要はないだろ」

「はっ、馬鹿かてめえらは！」

天才になるためには華やかで恵まれちゃならねえ！

だが不幸になれば天才になり得る！

恵まれた生まれ、恵まれた容姿、恵まれた才能、恵まれた環境！

こんな恵まれた人生じゃ私は駄目になる！

素晴らしいものは地獄からしか生まれない！過去の偉人たちの多くは不遇な人生を送っていて
偉大な発見は大抵劣等感から生まれている！
だから私は幸せになっちゃいけない！
幸福になるぐらいなら死んだほうがマシさ！！！！」

なるほどな、確かに歴史上の偉人の大半は不幸な人生を送っていた。
しかしな…

芳賀裏が口を開こうとしたとき

パチンッ

小さく乾いた音が本だらけの部屋に響いた。

見ると、怒江がくじらの頬をはたいたのだった。

「幸福になっちゃいけない？ふざけないで！世の中には幸せになるうとしてもなれない人たちがたくさんいるんだよっ！！確かに昔の偉い人たちは不幸から偉大な発見をしたかもしれない…」

でもそれはたまたま不幸だっただけだよ！どんなに不幸でもどんなに幸福でも身近な疑問を追求していったから偉大な発見をしただけだよっ！それに死ぬなんて簡単に言わないで！命はそんなに軽いものじゃない！

不幸を求めてもその先にあるのは不幸だけなんだよ！

だからお願い！

幸せになりについて…」

そう言っつて怒江はボロボロと涙を流しながら、くじらを強く抱きしめた。

「確かに怒江の言った通りだ。

それに、素晴らしいものは地獄からしか生まれないってのも違うな。

そんな考えが通つたら、今の技術は遙かに進歩しているはずだ。素晴らしいものは天国だろうが地獄だろうが努力をしたやつと生まれながらの天才から生まれる。

これを見る限り、お前は生まれながらの天才だろう。

それに努力もしている。

それだけで充分さ。

ただ、あまり頑張りすぎるな。

よく食べて、よく遊び、よく寝て、色んなものに触れることが大事だと俺は思つぜ。」

そう言つて俺はそこら辺にあつた数枚の紙切れにサラサラと書いて机の上に置いた。

「俺みたいなのやつでもこのぐらいはできる。ましてやお前はそれを優に越えるだろうな」

「……………」

そう言って俺は扉のほうに足を向けた。

怒江は、今度一緒に遊ぼうね、と笑顔で言って芳賀裏に付いていた。

「不幸を求めてもその先にあるのは不幸だけ、幸せになりにいけるか。」

くじらはそう呟きながら何気なしに芳賀裏が書いた紙切れを見た。

!!!?

そこには難解な計算式がびっしりと書かれていた。

「あーっ…」のぐらっっっっ」

くじらは微笑みながら席についた。

次の日から、くじらは外に出て遊ぶようになった。

ただ

「だーかーらあ、何で朝から勝手に俺の部屋に入ってきてるんだよ
！」

「そんなの、てめえが遅くまで寝てるから悪いんだろ！なあ、怒江ちゃん。」

「うん！はーくん、ちゃんと早起しなきゃだめだよ。」

内外構わず、ほとんど怒江と一緒にいるようになった。

第五話『幸せになりについて…』（後書き）

神様「いや、剛も良かったけど

白組の坂本冬美も良かったな。」ホクホク

ていん？がー！「ガキ使見る前に休憩が終わった……」「ドンヨリ

神様「まあまあ、こんなこともあるつかとあらかじめガキ使は録画
しておいたから

後で一緒に見ようね。

ん？なにになに……

ていん？がー！くん、今回は正式なゲストが来ているそうだよ。」
カンペミル

ていん？がー！」「ママジのママジで！？」

そ、それじゃあ、やるよ。

今話のゲストは黒神くじらちゃんです！！！！」

くじら「よろしくな。」

神様「さて、最初の質問だが

くじらくんは何故芳賀裏くんじゃなくて怒江くんに惚れたんだい？」

くじら「ほ、惚れたとかそんなんじゃねえよ！！！！

ただ…芳賀裏よりも怒江ちゃんという言葉が身にしみたというかなんというか……
って、何言わせんだ！！」ガ

神様「はっはっは（笑）」

さて、時間がなくなってきたからもうそろそろ終わりにしよう。」

くじら」「えっ!?!」

ていん?がー!」「いや!まだ質問一つしかやってないんですけど!?!」

神様「…君は次話の書き溜めを用意したのかね?」

ていん?がー!」「ギクッ」

神様「プロデューサー、彼はもう用意したのかね?」

プロデューサー「シテナイデス

神様「ほら、そういうことだからせめてこの小説を見ている読者に今年最後のあいさつをして締めくくろう。」

くじら」「お、お。」「

ていん？がー！」「そ、そうだな。」「

ていん？がー！」「それでは監さん！」「

一同「来年は良いお年を！」「

第六話『もう友達だろ?』(前書き)

ていん?がー!」皆様、昨日に更新できなくて申し訳ありません。
無計画に言ったことで皆様にご迷惑をかけることになってしまいお
詫び申し上げます。

しかし今日は予定通りもう一本更新します。
では、今話をどうぞ。」

第六話 『もう友達だろ?』

今月9日、〇〇市 町 番地の民家で夫婦の惨殺死体が発見されました。

発見されたのは宗像戒さん(30)、宗像咲さん(29)で警察の調べによりますと、宗像夫妻には長男の宗像形くん(7)、長女の宗像恋ちゃん(3)がいることが判明しましたが、二人は小学校と幼稚園に行っていたので事なきを得ました。幼稚園が終わった後に恋ちゃんは警察に保護されましたが、形くんは小学校が終わっても姿が見当たらず、形くんのクラスの担任の教師に伺ってみると、「午前の授業まではいたが午後の授業からはいなくなっていた。」と答えており、警察は殺人事件の捜査及び形くんの捜索を進める方針です。

次のニュースd「プツッ

「うわぁ〜、9日って昨日」 番地ってこの近所だよね、怒江こわ〜い」

「おい芳賀裏！俺の怒江ちゃんに何かあってみる！その瞬間に解剖してドブに捨てるぞゴラ!!」

「くじらちゃん、はーくんを解剖しちゃだめだよ〜！」

「ッ！？い、いや！そんなわけねーじゃねえか！なあ芳賀裏！」

「……………もう帰ってくれ。」

そのあとはなんやかんやあったが俺は怒江とくじらを家に届けるために二人の帰りに連れ添うことになった。

まあ、近くで殺人事件が起こったから物騒だわな

え？いくら男でも幼稚園児一人じゃ心もとないつて？

それはあえて聞かないでくれ……………

そして俺達が途中の土手を歩いている時、ふと下の河原を見ると河岸で男の子が座っているのが見えた。

殺人事件の犯人が近くにいるかもしれないのに俺たちぐらいの子供が一人で外にいるなんて普通じゃあり得ない

取り敢えず俺達はその男の子に何をしているかを聞こうと土手を下りようとした瞬間

その男の子はスクツと立ち上がり、川にジャボジャボと入っていった。

ツ!? マズイ!!

あの川は結構深いぞ!!

俺たちは急いで土手を滑り降り、その男の子を岸まで引き上げた。

「おいっ!! 何で自殺なんてばかなことをしようとしたんだ!!」

その男の子は目をキョトンとさせてしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「……………めしたかったから。」

「なに?」

「自分を殺したら死ぬか試したかったから。」

「なっ……!?!」

「お父さんとお母さんも殺したら死んじゃったからね。」

あっ、そう言えばまだ妹が生きていたんだっけ。

まあいいか

それよりも自分を殺してみよう。」

「てめえ……まさか、今日のニュースに出てた宗像形か?」

「ああ、もうニュースになっていたのか。
そっだ、僕が宗像形だ。」

「そんな…」

何でお父さんとお母さんを殺したりしたの…？」

「それは、殺したら死ぬか試したかっただけだよ。

ある日ふと思ったんだ。

人間はなんて殺しやすそうな弱くてかすかで儂く頼りない生き物だと。

頭を砕いても死んでしまう。

首を絞めても死んでしまう。

胸を刺しても死んでしまう。

腹をもいでも死んでしまう。

なんだこれ？

こんな生き物

殺さずにいる方が難しいよ。

だから君たちを見てると殺したくなる。

生きたかったら早くここから消えることをお勧めするよ。」

(何なんだよこいつ！あからさまに異常アブノーマルだろうけど、別次元にやべーぞー！)

(…確かにこの人から殺気を感じるけど、何でだろう？この人…泣いているの…?)

「…お前、おかしいことをいつてるじゃねえか。

そのセリフ、まるで誰も殺したくないみたいに聞こえるぜ?」

「「えっ!?!?」「」

芳賀裏の一言に宗像は少しだけ眉をひそめた。

「ふーん、君は僕が嘘をついているとでもいいのかい?
じゃあ、【殺そう】」

そう言って宗像はどこからともなく血まみれの包丁を取り出した。
その瞬間、宗像から恐ろしい程の殺気が溢れだした。

宗像の行動に怒江とくじらは思わずのけぞった
が

芳賀裏は怯むことなく続けた。

「いや、お前は殺したがってない。
それどころか、両親を殺したのはお前じゃないだろ？」

「…まだ、そんな世迷い言を言えるとは威勢がいいんだね。」

君みたいな子は嫌いじゃないよ。」

そう言い終わるか終わらないかの刹那、宗像の手から包丁が消えた。

くじらは宗像が包丁を仕舞ったのかと思いきった。

が、その想像も何かが地面に打ち付けられる音とともに崩れ去った。

宗像の手から消えた包丁は怒江の胸に深々と突き刺さっていた。

「アああアああアああアアあ
……！！！！」

くじらは怒江が刺されたことに気付くと怒りとショックのあまりに宗像を殺そうと突っ込んだ。

が、芳賀裏が行こうとするくじらの足を引っかけて転ばせた。

「ッ！？何すんだよ芳賀裏！！あいつが、あいつが怒江ちゃんを……！！」

「待てくじら、あいつは怒江を殺してない。」

「はあ！？なに言ってるんだよ！！あんなものを胸にさされたら……ッ！？」

くじらが激昂しながら怒江の方を見るとくじらは目を見張った。

何と、胸を刺されたはずの怒江の手がかすかに動いているのだ。

「怒江は今、心臓と肺を避けたところを刺されている。
こんなやり方、殺したがりには出来ないぜ。」

そして…」

芳賀裏は怒江に近づくと刺さっていた包丁を抜いた。

すると怒江の胸の傷はふさがっており、服もいつの間にか元通りになっっていた。

「う…ううん…は、はーくん？」

「ほら、これで大丈夫だ。」

立てるか怒江？」

この光景に宗像はただ立ち尽くしていた。

「…君には全部お見通しだったんだね。」

「だから最初から言ってるじゃんか。
殺人衝動が本物で両親を殺したとしたら、もっと他の人を殺してま
わるはずだ。」

そして、両親を殺したあとに自殺するのも殺人衝動としてはおかし
い。

いったい何があったんだ？」

「…僕の殺人衝動は本物だよ。
人間を見ると殺したくなるのも本当だ。」

ただ…人間は殺したら死んじゃうから…

確かに僕はお父さんとお母さんを殺していない…

ふと嫌な予感がして

家に帰ったときにはお父さんとお母さんはもう殺されてたんだ。

だけど…僕はお父さんとお母さんの死体を見て悲しむどころか、素
晴らしい殺し方だと思ってしまった。

このままじゃ近い内に妹も殺してしまう。

僕は生きてちゃいけないんだ。

だって僕が生きてたら絶対に人を殺してしまうから…

普通に生きたかった

でも、無理だよ…

どんなに抑えても殺人衝動は必ず出てくる。

だから殺人を防ぐために自殺しようとしたんだ。

…もつ……どつにもならないんだよ…」

「そついうのは、友達に言ったらどつだ？」

「は…?なに言って…」

「俺たちは話したときからもう友達だろ？」

「!?!」

「一人で抱え込むな
辛かっただろ?一人じゃ駄目なら俺たちが支えるからさ
俺たちを信じてくれ」

(あんなに殺そうとしてたのにそれに構わずに…)

ああ、この殺人衝動アブノーマルがなかったら…
せめて殺人衝動これを抑えられたら…(

その瞬間

ウン

宗像は自分の視界が一瞬ずれたような感覚に襲われた。

しかし

「あれ…？殺人衝動が…起こらない…？」

宗像の殺人衝動は退いていたのだ。

「なにっ！？」

「やった　！！
はーくんがやってくれたんだね！
ありがとう　！」

「あ…ああ。（おかしいな、俺は『思い通り』にしてないぞ…?）」

「ありがとうございます…ありがとうございます…」

形はボロボロと涙を流した。

欲張りストア雑貨マスターが追加されました。

《なっ!?!?》

彼が能力を使っていないのに能力が追加されただっ!?!?》

『男とも女ともとれるその者』は驚愕したが、

しばらくして落ち着きを取り戻し

《…まあいい、この問題は後にまわそう。
しかし、彼も大分成長したがまだ『仕事』には早いかな。》

そう言うと、『男とも女ともとれるその者』は紅茶を飲み干した。
すると、どこからか『あまりにも小さい少女』がやって来た。

ひどうしますう、神様？あの能力が宗像形の殺人衝動を抑えてるっ
ぽいですし、代わりは作れませんよお？

《はははっ、その呼び方はやめたまえ、アンラ。普通にカフサミで
いいよ。》

この件だが時期が来たら君に任せようと思う。
わかるね、アンラ。》

「わかりましたあ、カフサミさまあ。」

そう言ってアンラは紅茶を注いだあと、いつの間にかどこかに消えた。

《ふふふ、もうそろそろプロローグが終わる。
それまでは『死んじやだめだよ』》

カフサミは含み笑いながら紅茶を飲んだ。

第六話『もう友達だろ?』(後書き)

反省会

ていん?がー!」あああ ああ。

神様「おいおい、もう止めといたほうがいいよ。」

ていん?がー!」まあまあ、男やったら酒に溺れようぜえいカ〜フ
サミちゃん」

カフサミ「いや、概念だから性別ないし。

しかも、こんなことで名前明かしが出るなんて悲しいよ。」

ていん?がー!」そおんな悲しいこともお酒の力で吹っ飛ぶってね
!なははッ!」

カフサミ「全く…
君が飲んでいるのはウイスキーだろう？
三週間前に43度のウイスキーをがばのみすぎて部屋中に吐いた
のを忘れたのかい？」

ていん？がー！「………そういえばそうだな………」

カフサミ「ふう…：やっとわかったかい。それじゃあ今回は早く閉め
て次話に行こう。」

ていん？がー！「…：ああ、次回もよ」「オロロロロロ

カフサミ「感想もお待ちしているよ…：って、うわあああ！？
アンラ！アンラ早くごみ袋持ってきて！…！」

第七話『彼のおかげで』（前書き）

ていん？がー！「あぁ〜まだ気持ち悪う」

カフサミ「ほら、そんなに飲むから二日酔いが酷くなるんだよ。」

ていん？がー！「お気に入り件数が前作より伸びねえんだよぉ〜！
！（うう、口で言っ守れないのはカツコ悪くてさ。）」「

カフサミ「酔いすぎて本音と建前が逆になってるよ。」

まあでも、今の展開は前作のリメイクみたいなものだから数を増やすのは難しいだろうね。」

ていん？がー！「……………」

カフサミ「まあ、リメイクでも良い話が書ければそれでも良いと思うよ。」

ていん？がー！「……決めた。」

カフサミ「何をだい？」

ていん？がー！「1月6日までに前作のリメイクを全て終わらせる。」

カフサミ「…それは本当に言っているのかい？」

ていん？がー！「ああ。」

カフサミ「次守れなかったら、今のお気に入り登録者に見放されるところになるんだよ、それでもかい？」

ていん？がー！「ああ！やるからにはやるー！！」

カフサミ」「……………そうか、それなら私も最後まで付き合おうよ！

「応このコーナーの仲だからね。」

ていん？がー！」「カフさん…ありがとう！

それじゃあ今話もどうぞ！」「

第七話 『彼のおかげで』

こんにちは、宗像形です。

あのあと、お父さんとお母さんを殺した犯人は捕まり、僕と恋は警察に保護されて孤児院に行くことになりました。

世間的には残酷な犯人に両親を殺されたかわいそうな子供でしょう。

恋にはお父さんとお母さんが殺されたことは伏せました。

まだ三才の子供が両親の惨殺を聞かされたら絶対に歪んでしまうから。

恋にはせめて普通の道^{ノーマル}を歩んでほしい。
こんな僕と違^{アブノーマル}ってね

僕には両親の死よりも辛い殺人衝動ぶつどうがありました。

殺人衝動それは僕に普通ノーマルであることを許さず、壊れた人生を余儀なくさ
れました。

人を見れば殺すことしか考えられず、両親の死体を見たとき悲しみ
を感じるどころかその殺し方に感動を覚えてしまいました。

その瞬間、今まで何とか抑えてきた殺人衝動アブノーマルの箍くわが外れてしまいま
した。

友達のAの頭を鈍器で殴って殺したいクラスでマドンナのBの首を切って殺したいひょうきんもののCの腹をもいで殺したいあまり面識のないDに硫酸をかけて殺したい隣のクラスで地味なEの心臓を刺して殺したい担任の優しいF先生の首を絞めて殺したい近所の元気なGおばさんをバラバラにして殺したい

妹の恋を両親と同じ殺し方で殺したい

ああ

コロシタイ

コロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイ
コロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイ
コロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイ
コロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイ
コロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイ
コロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイ
コロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイ
コロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイ
コロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイ
コロシタイ

僕は殺人じつりつを防ぐために、みんなを殺す前に自殺することにしました。

最初は怖かったけれど人殺ほくしがいなければみんな幸せになれる

そう思うと自殺へのためらいがなくなり、死のうとしました。

しかし彼らに止められました。

紫の短い髪の女の子に。ピンク色のふわふわした髪の女の子と銀髪の
彼でした。

止めてくれたことは少し嬉しかったけど下手をすると彼らを殺してしまうかもしれないので殺気を出して追い払おうとしました。

彼らのうち二人の女の子は少しあとさつたけど

真ん中の彼だけは怖がるどころか僕を助けようと思いました。

僕のことをここまで考えてくれた人は初めてでした。

思えばここまで殺人衝動じつんを打ち明けたのは初めてかもしれませんが。

助かりたい

殺人衝動これをなくせなくてもせめて抑えたい…

その瞬間

願いが通じたのか僕の中の殺人衝動が退いていくのを感じました。

奇跡

僕は今までの中で一番泣きました。

「あにっえ、あにっえ!」

「ん、何だい？」

「ぼーっとなってびびったのですか?」

「いや、少し前のことを思い出してね。」

「どんなことなのですか？」

「うん、大切な友達のことをね。」

「ふーん、そうなのですか。」

そういえばちちうえとははうえはどこにいったのですか？」

「えっ…と、お父さんとお母さんは遠い国に旅行に行っただけじゃなく、いなくなるから」

「僕達は孤児院というところに行くんだよ。」

「そうなのですか…。そびっしりのです…。」

「…でもね、孤児院にはたくさんの子供がいるからきつとたくさん友達ができるよ。」

「ほんとうですか！わたしはいっぱいゆづじんをつくりたいです！」

「ああ、恋ならできるよ。」

「さあ、そろそろ行くっか。」

「はい、あとつえー！」

そうして僕は手を繋いで孤児院の門を開けた。

そして時は流れて僕は小学五年生になり、恋は小学校に入学しました。

小学生に入学したばかりの頃は恋に友達が出来るかどうか不安だったけど

すぐに友達がたくさんできました。

そして僕のほうは以前よりもたくさん友達が出来ました。

しかしなぜか女の子の友達が多くなり

僕と一緒に遊ぼう、と言うと女の子達はとても嬉しそうに承諾してくれません。

中には鼻血を出しながら答える女の子もいたので僕が「大丈夫かい？」と聞くと、「け、形くん大丈夫って聞かれたノノもう死んでもいい…ノノ」と言っって顔を真っ赤にさせながら気絶しました。

何か変なことを言ったのかな？

また、めだかちゃんのお兄さんである真黒も僕と同じクラスでも整った顔をしているのですが、自己紹介のときに「僕は全ての妹が大好きです！！」
妹LOVE！！」と言った瞬間、クラス中の女の子に嫌われました。

真黒…恋に手を出したら【殺すよ】？

でもそんな真黒と僕は仲の良い友達なのでいつも一緒にいるのですが

「それでねっ、それでねめだかちゃんとかじらちゃんがご飯を食べた後の顔はまさに天使のように可愛くってさ……」と休み時間はおろか授業中でも（僕の隣の席は真黒）絶え間なくめだかちゃんとかじらちゃんの妹話を一方的に話し続けます。

そのたびにクラスの子が、「形くんになんてこと言ってるのよ！！」と言って真黒をボコボコにしています。

せめて、学校ではやめてほしいです。

そんなある日、学校の下校中にいつものように真黒が僕に延々と妹話をしていると真黒は急に黙り込みました。

今まではそんなことはなかったの、「どうしたの?」と聞くと
真黒は

「いやあ、今こんな生活が送れてるのも彼のおかげだなんて思って
さ。」

「芳賀裏くんのことかい?」

「ああ、くじらちゃんが外に出るようになったのは彼のおかげだ。
それにめだかちゃんも前まではつまらなさそうにしてたけど、彼
のおかげで今じゃ毎日を笑顔で過ごしてくれて嬉しい限りだ。
さらに彼のおかげでめだかちゃん達は怒江ちゃんや針金ちゃん、そ
して形くん、君と出会えた。」

本当に彼はいろんなことを変えてくれた。」

「確かに。」

僕も彼に出会わなかったら今頃恋を残して死んでただろう。
だから僕も彼には感謝している

こんなに素晴らしい人生をありがとうってね。」

二人は微笑み合つと通学路の少し古ぼけた道を歩いていった。

第七話『彼のおかげで』（後書き）

こんにちは、宗像形です。

今日は孤児院に友達我真黒が遊びに来ました。

形「珍しいね、めだかちゃんやくじらちゃんがそばにいないのは。」

真黒「いやあ、今日は友達として遊びに来たんだよ。
たまにはこういう日も良いからね。」

形「そうか、嬉しいよ真黒。」

恋「あにうえく、どうなさったのですかあく？」

真黒「ズキューン」

形「ああ、紹介するよ。

この子は宗像恋。僕の妹だよ。

そしてこっちが僕の友達の黒神真黒だよ。

恋、ご挨拶なさい。」

恋「はじめまして、むなかたこいています。

くろかみどの、よろしくおねがいします。」

真黒「……………か」

恋「?」

真黒「かあわいい

!!!!

何これ、めだかちゃんとかじらちゃん並みにかわいいよ……!

ああ、これは是非お持ち帰りしようそうしよう……!」

恋「ひっ……ぶれいもの……！」

形「……」ジャキッ

真黒「それじゃあ、テイクアウトしちゃいます……！」ルパンル
パン

形「……」ズバズバズバ

真黒「ギャア」バタッ

形「さて、今日のコミ当番は僕だったっけ？
早く捨てにいこう。」

翌日、真黒はまた普通に来ました。

第八話 『自分なりの正義を見つけたら』 (前書き)

ていん？がー！」「……………」

カフサミ「……………」

ていん？がー！」「…うん…今回は…」

カフサミ「いや…第零話も同じ感じであって、こついでこつともあるさ！だから……」

ていん？がー！」「うん…だけど今回は……」

アンラ「あゝ！今回は『手抜き』ですうゝ…！」

ていん？がー！」「グサッ

カフサミ「こら！アンラ、それを言うんじゃない！

ただでさえお気に入り件数が増えなくて脆くなってるんだからそれ以上は言わないように。
わかったかいアンラ？」

アンラ「わかりましたあ。」

ていん？がー！」「

カフサミ「はあ…また再起不能か。

いつもこんなパターンのような気がするけど、今話もどつぞ。」

第八話 『自分なりの正義を見つけたら』

「じゃあ鬼瀬さんはまだ入ったばかりだからしばらくは見習いという事で私についてきてね。」

「よ、よろしくお願いします。」

上級生のお姉さんにそう言われて
私は緊張しながらも答えました。

なぜこういうことになっているかと言いますと
私、鬼瀬針金はなんと本日風紀委員会にはいりました
……！

あっ、すいません。

私の友達がこんな感じのことをやったような気がしたのでつい……

そんなことは置いて、なぜ私が風紀委員会に入ったかといいますと

私のお父さんが社会の規律を取り締まり、人を助ける警察官なので、お父さんに近づくために第一歩として風紀委員会に入りました。

だから私は風紀委員会で規律を守っていくようにがんばります！

少し緊張しますけど…

「はい、そこ。ゲームを学校に持ち込まない。」

「ちえ、わかったよ。」

今、私はさつきも言いましたように見習いとして風紀委員会のお姉さんに付いていって風紀委員会の仕事を見学しています。

風紀委員会の仕事を見てすごいなあと思います。

私は緊張しやすい性格なのであんな風に取り締まる為に風紀委員会でこの性格も直したいです。

私達が仕事をしながら廊下を歩いていると御幸返くんと人吉くんを見かけました。

あのふたりが江迎さんや黒神さんがそばにいないのは珍しく、彼らは男子トイレに入ろうとしました。

が

その後ろから江迎さんと黒神さん姉妹が男子トイレに入り
「って、なにをしてるんですか　　っ!？」

「あっ、針金ちゃん。どうしたの？」

「どうしたの？じゃないですよ!!
何、堂々と男子トイレに入ろうとしてるんですか!？」

「え、それははーくんがトイレに入って行ったから私も入ったんだよ。」

「そのまま言わなくてもわかりますよ!!」

はあ、くじらさんも何で止めないんですか?」

「はっ、愚問だな。」

俺の心は常に怒江ちゃんと共にある

故に怒江ちゃんあるところに俺ありだ! (キリッ!)

「(キリッ!) (じゃありませんよ　っ!!)」

かつこよく言ったつもりでしょうが、それよく聞いたらただのスト
ーカー宣言ですよ!!?

…はあ、黒神さんは何で男子トイレに入ろうとしたんですか?」

「私か? 私は善吉がちゃんとトイレで用を足せているか心配で心配

で…」

「過保護ですか！？それも色々通り越して怖いですよ…！」

「んっ？ああ、また男子トイレに入ろうとしたのか、怒江…」

「ちょっと、御幸返くん！あなたいつも江迎さん達と一緒にいるでしょ…？」

だから御幸返くんからも何かいってください！」

「…といつてもなあ、俺も参つててもう風紀委員会さんのほうで『コイツ』をなんとかしてもらえませんかねえ？」

「なんとかって、御幸返くんはーくんが怒江のことコイツって言うた…。」

グスツ…はーくん、怒江のこと嫌いなんだ…」

「!?!?…いや、江迎さん別にそんな意味で言ったわけじゃ…」

「ヒック…今度は怒江のこと名前じゃなくて名字で呼んでる…やっぱり、グスツ…はーくんは怒江のこと嫌いなんだ…グスツ…ヒック…」

江迎さんが泣き始めたと同時に周りの男子（くじらさんも含む）が御幸返くんにまがまがしくて黒い視線を送っていました。

「は〜が〜りい〜、てめえは大罪を犯したな。これはちよいと死刑が必要だわあ〜。」

「あ、あの〜、くじらさん…死刑という言葉は軽く使えるものでは…」

「うるせえ!?!?!とつさと死ねやああつ!?!?!」

「ギヤアアアアアアアアアアッッ

!!!!」

数分後、御幸返くん（らしきもの）が横たわる中、私は江迎さん達に今後男子トイレに入らないように注意したあとその場を去りました。

御幸返くん、ご冥福を祈ります。

しばらく廊下を歩いていると、いかにも不良のような格好をした人達が堂々と歩いて来ました。

「あっ！あれはまさに校則違反ですね！さっそく取り締まりまじょう！」

「いや…、鬼瀬さん…『あれ』はいいよ…」

えっ！？何ですか！？校則違反を取り締まるのが風紀委員会なんでしょ！！とにかく私が行ってきます！！！」

「あっ、ちょっと…」

「ちょっと、あなた達！校則違反ですよ！」

「あ？なんだこのチビ？」

「チビじゃありません！私の名前は風紀委員会の鬼瀬針金です！」

「風紀委員会？ああ、校則違反してる俺達を野放しにしてるやつらか？」

「えっ？」

「確か、軽い校則違反は取り締まって俺達みたいなやつはほっとしてるんだって？ダッセ！」

「あ……」

「とにかく知らないとはいえ俺達を取り締まるうとしたお礼として、二度と俺達を取り締まれないように可愛がってやんよ……！」

そう言くと不良の人達は私たちに襲いかかってきました。

「ひっ、いやああああっ！…！…」

しかし

「女の子に対して複数人で襲いかかるのはいただけいな。」

！？

その声のほうを振り返ると形さんが立っていました。

「なんだてめえは!？」

「僕かい？僕の名前は宗像形。友達を助けに来た1人の人間さ。」

「かといって僕はあまり争いが好きじゃなくてね。とりあえず【帰ってくるかい?】」

「ヒッ、っわあああああ!?!?!?!」

形さんからとつもない殺気がでたと思ったら、不良の人達はされに恐れをなして逃げていきました。

私たちがあまりのことにポカンとしていると、形さんが話しかけて

きました。」

「ふう、大丈夫かい？」

「え、ええ、なんとか。」

「ん？その腕章をしてるといふことは針金ちゃんも風紀委員会に入つたのかい？」

「は、はい。」

「そっか、風紀委員会をやっていると遅かれ早かれあいつ連中に遭うことになるから気を付けたほうがいいよ。」

「……………」

「それじゃあ、またね。」

「あ、あの！」

「ん、なんだい？」

「私がやるうとしたことは間違いだったんですか？」

「いや、正しいよ。針金ちゃんはあるべきことをしようとした。しかし、力が足りなかっただけだ。僕もやるうと思えばあいつらを力づくで追い払うことはできた。でも、僕は自分なりの方法で追い払った。わかるかい？針金ちゃんも自分なりの正義を見つけたらどうすればいいかわかると思うよ。」

それじゃ僕はおいとまさせてもらおうよ。またね、針金ちゃん。」

そう言って形さんは去っていきました。

「自分なりの正義かあ……」

「校 則！違反です！！」

そう言いながら針金は複数の校則違反者を取り締まっていた。

「あ？なんだよ、このぐらいいいいだろ？なんなら痛い目みるかあ！」

校則違反者の1人が針金を殴ろうとした瞬間

ドカッバキッ

針金は殴ろうとした校則違反者を逆にコテンパンに返り討ちにした。

「あれ？ いったいどうしたのかな、針金ちゃんは？」

「ああ、形くんかい？ 何でも針金ちゃんは徹底的に風紀を取り締まるために空手や柔道その他もろもろの格闘技を始めたらしいのだけど、そっちの才能があったらしくてね。

今じゃ一人で六年生の男子も倒せるようになったというわけさ。しかしどうしたのだろうねえ？ ついこの前までは普通だったのに何かあったのかな？」

「ち、さあ…どうだろうね？」

（しかし自分なりの正義を見つけるとは言っただけど、まさかここまでするとは思わなかったなあ…）

形は針金が強引な取り締まりスタイルをするようになった原因を黙殺することを密かに誓った。

第八話『自分なりの正義を見つけたら』（後書き）

芳賀裏「ゴクッゴクッゴクッ

芳賀裏「ブハア、やってらんねえよ全く…」

アンラ「ウーロン茶を一気飲みしてどうしたのですかあ？」

芳賀裏「ん？誰だお前？」

アンラ「アンラはアンラですう。」

芳賀裏「アンラって言うのか…」

なあ、少しでもいいからこんな俺の話を聞いてくれるか？」「

アンラ「わかりましたあ。」

芳賀裏「俺さ…この小説の主人公のはずなのに
怒江やくじら形さんに針金達より目立ってないんだよ…主人公なの
に……」

アンラ「そうですかあ〜。」

芳賀裏「ははっ笑っちゃうよな…でもこのままじゃあ影の薄い主人
公っていうタグも貼られちゃう…
どうしたらいいんだ……。」

アンラ「あ！アンラに良い考えがありますう！」

芳賀裏「え？」

アンラ「お兄ちゃんをそんな目に合わせている悪いやつをアンラが

倒すですう。」

芳賀裏「ええ！？そんなことして言いのか？」

アンラ「神様に頼めば良いですう。」

芳賀裏「ううん、何もやらないよりはましだな…
よし！行くぞアンラ！！」

アンラ「わかりましたあ。」

このあとカフサミの気まぐれでカフサミを含めた3人が作者をフルボッコにしましたとき。
めでたしめでたし。

アンラ「ふうー、こんなものですかねえ。」カキカキ

カフサミ「アンラ、ちょっとこっちに来てくれないか？」

アンラ「わかりましたあ。

あつ、感想やできればアドバイスもどしどし来て下さい！
応援よろしく願います！

カフサミさまあ、今行きますう。「トテトテテ

第九話 『オコガエリハガリくんは。』 (前書き)

ていん？がー！「うん」

カフサミ「どうしたんだい？」

ていん？がー！「いやさ、リメイクが終わったあとの構成は大体出来てるんだけど、肝心の設定が中々出てこないんだよ。」

カフサミ「つまり？」

ていん？がー！「オリジナルの異常や過負荷が全然思い付かないんだ。」

カフサミ「ひとつもかい？」

ていん？がー！「いや、5つは思い付いたんだけどそれじゃ足りない

いんだよ!」

カフサミ「増やしすぎるのも問題じゃないのかい?」

ていん?がー!」それもそうなんだよなあ。」「ウーン

カフサミ「どうしたもののか。」

ていん?がー!」そうだ!アンケートを取ろう!」

カフサミ「……………は?」

ていん?がー!」オリジナルの異常や過負荷を募集するアンケート
をするかしないかのアンケートだよ!」

カフサミ「ややこしい……。」「

ていん？がー！」「よし！アンケートは下記の通りだ！」

？募集のアンケートをする

？募集のアンケートをしないでFUCK！

カフサミ「誰もこのアンケートをしようとしないう一票。」

ていん？がー！」「ちよちよちよ！？

それ全く違うから！！

早速壊しちゃうなよ！...！」

カフサミ「馬鹿馬鹿しすぎるよ...。」

アンラ「馬鹿ですう〜。」

ていん？がー！「きい〜！！

皆はこれを受けると俺は信じてるからな！！
覚えてろよ！！！！」「ピュー

アンラ「あつ、逃げたですう。」

カフサミ「さて、あんな馬鹿はほつといてティータイムとしよう、
アンラ。」

アンラ「わかりましたあ。」

このアンケートはガチでやります。

期限は特に設けません

皆様がこのアンケートに参加してくれたら嬉しいです！！

それでは今話もどうぞ！

第九話 『オコガエリハガリくんは。』

『5人揃って、極道戦隊ヤクザファイブ！』

「いっけえ　！ヤクザファイブ！」

「『……………』。『……………』」

今日、私、鬼瀬針金は江迎さんとくじらさんと一緒に御幸返君の家に遊びに来たら、人吉君と黒神さんに御幸返君が熱心に戦隊もののテレビを観ていました。

そこだけを見たら一見、何の変哲もありません。

しかし人吉君達が見ているテレビは明らかにおかしい点があり、江迎さんとくじらさんは『それ』を見て現在進行形で固まっています。

それでは固まっている江迎さん達に代わってまず一言、言いたいと思います。

「ヤクザファイブってなんですかあああつつつつ
!!!!?????」

「えっ、知らないの？針金ちゃん？
任侠の力で悪を倒す極道戦隊ヤクザファイブだよ。」

「知りませんよ！？てか、何でヒーローなのにヤクザなんですか！
！？

設定の時点でダメでしょっ！！」

「え、でも面白いよ」。

特に敵を倒したあと、情報を得るために敵にエンコ詰めしたりして
情報を吐かせたらそのあとにドラム缶の中にコンクリ詰めして海に
沈めるところとかすごい面白いよ」

「なおさらアウトでしょ　　！！？」

ダメだこの人達、何とかしないと…

そのとき

ガチャッ

「やあ、お邪魔するよ芳賀裏くん。」

「御幸返殿、お邪魔致します。」

「ヤッホー！」

会いに来たよ　！めだかちゃんにくじらちゃん！」

ああ、良かった…

少しは常識のある人達が来てk「あっ！極道戦隊ヤクザファイブ
！兄上！見てもよろしいですか？」

……………え？……………

「ああ、見ておいで、恋。」

「あつ、本当だ！」

僕はちよつと前に見始めたけど、ヤクザピンクがくじらちゃんに似ていて可愛いんだよねえ〜

あつ、もちろんめだかちゃんも可愛いんだけどね。」

「そう言われてみたら確かに似てるね。」

それに僕はなんといつてもヤクザレッドの漢気がかっこいいと思うよ。」

「あんたらもかいいいい

「!!!??」

すると、私の叫び声で今まで固まっていた江迎さん達が我に返り

「ね、ねえ、はーくん
それって面白い…の？」

「……………」

「お、おいつ、芳賀裏！怒江ちゃんがはなしかけてんだから何かい
ったらどうなんだ…！」

「……………」

「…はーくんは怒江よりテレビのほつがいいのね…グスッ…」

「む、怒江ちゃんつつっ!？」

芳賀裏てめえ、よくも怒江ちゃんを泣かせや&「じゃかあしいっ!
!」ビクッ!……」

「われえ、人がテレビを観てるときに邪魔くさりよつてえ…

コンクリ詰めして〇〇湾に沈めたるおかああ、あああん!!!!?」

「グスッ…はーくんが…ヒック…はーくんが変になつちやったよお
おうわあああん!!!!」

「……………ハガリ、モウテメーニアルノハカイボウカシケイダケダ…
ダカラ……………」

さっさと死ねやあああつっ

!!!」

「上等じゃあわれええええ

!!!」

「あつ、ヤクザブルーがヤクザレッドに勝負を申し込んだ!」

「兄上!何故ヤクザブルーはヤクザレッドに勝負を挑んだのですか?
」

「ああ、これはあえてレッドに勝負を申し込むことでどちらが極道
戦隊のリーダーを仕切るのかはつきりさせようっていうブルーの考
えさ。」

「くじらちゃん…いや、ヤクザピンクが戦う姿可愛い……ハアハア」

「……………帰ろうかな……………」

頭痛がしてきたので、帰ろうと思います…

あっ、もうすぐ〇陽に吠えるの再放送があるんだっけ、と思いながら帰ろうとすると

今までじっとテレビを見ていた黒神さんがスクツと立ち上がり

「あっ、そうだ

来週の日曜日にヤクザファイブのヒーローショーがあるから皆でいかないか？」

黒神さああああん、空気よんでくださいいいいい！！？

今そんなこと言ってm「えっ、来週ヤクザファイブのヒーローショーがあるのか？」

よっしゃあ怒江も行こうぜ！」

「グスツ…えっ、はーくんが私を誘ってくれた…
これっでもしかしてデートのお誘い、いやもしかしなくてもデートのお誘いに決まってるわ…ふふふ、はーくんったら今の私との愛をより一層深めたいというのね…はっ、ということはまだ先になるけどこれは未来のプロポーズってこと!? キヤー、こうしちゃられないわ! 未来の夫のためにとびっきりのお弁当を作らなきゃ! したらまずは食材調達ね、一分一秒でも早く最高の食材を集めなくちゃっ!!」

「ああっ、どこに行くんだよお怒江ちゃん!!
俺も手伝うから置いてかないでくれよおお!!」

「わーい、ヤクザファイブのヒーローショーだぁ!」

「兄上! 来週が待ち遠しいです!」

「ああ、楽しみだね。」

「健気にあとを追つくじらちゃん…軽く萌え死ねる…!!」

え…………マジですか…?」

「5人揃って極道戦隊ヤクザファイブ!」

「「わー、ヤクザファイブ…!!」」

結局来ちゃいました…

やっぱり彼らだけ行かせると何かしら問題を起こすに違いありません。

あっ、先週のは違いますよ！

不健全な状態での風紀執行は当然だと見なしたからです、決してめんどくさくなつたからじゃないですよ！本当ですよ！！

…しかしこれよく見てみると

「ヤクザファイブ！

今日が貴様らの命日だ…！」

「なんじゃと、われえ…！その口聞けんようにしたろおかああ…！」

全然良いところが思い浮かばないです…

「どうぞだい、針金ちゃん。」

「あっ、形さん。」

「どうぞって言われても…正直私には…」

「ははっ、まあ人それぞれだからね。
でも結構良いところもあると思うよ。
ほっ」

「野郎共、血祭りじゃあぁ　　！…！！」

「わー、いつけえヤクザファイブ！」

「うむ、やっぱりヤクザファイブは良いな。」

「はい、あーんして、はーくん」

「ちよ、怒江！さすがにそんなビッグサイズのおにぎりまるごとはいらないから！！」

お願いだから無理矢理口に押し込まないで、マジで！！！！」

「ちくしょ　　！！！！芳賀裏めえ！俺ですら怒江ちゃんの手作り弁当を食ったことないのに！！！！」

「ふふっ、確かにそうですね。」

「でしょ？針金ちゃんもヤクザファイブは良いと思っただらっしょっ」

「あつ……それはちょっと……。」

でも……そんなに悪くないかな。

そう思いながら、私はヤクザファイブのヒーローショーを見ました。

「はあ、面倒臭いなあ。」

とある町の道路脇の歩道で少年は歩いていた。

少年は小学校高学年ぐらいで少しパーマの入った明るい緑色の髪に整った顔をしていたが、彼の目は一見、眠そうな感じだが無機質で何も映ってないかのような虚無感を漂わせていた。

彼が少しばかり歩いていると柄の悪いチンピラのような男とぶつかった。

「あつ、いてえなあ!!クソガキ!!!!」

「ん?あつ、そうだ、オジサン。ちょっと聞きたいことがあるんだけどいい?」

「オ、オジ…てめええなめてんのかああ!!!!」

そう言いながらチンピラのような男は少年の胸ぐらを掴み上げた。

「ねえ、早く聞いてもいい？」

「てめっ、ふざけたこと言っせ」ドグシャツ！！！！

チンピラのような男が少年を殴ろうと手を上げた瞬間、道路から大型トラックが外れて歩道に乗り出して男もろとも壁に激突した。

少年と少年を掴み上げた手を除いて…

少年は自分を掴み上げた『手』を振り捨てると

面倒臭そうな表情を浮かべ、

「あゝあ、だから早くって言ったのに。」

でもそれを聞かなかったオジサンが悪いよね、うん、そうだ。

それにオジサンはただ『運が悪かった』だけだよ。」

そう言って少年は再び歩き始める。

しかししばらくすると少年は急に止まる。

「あゝ、聞くの忘れてたよ。」

どこにいるんだろう？

オコガエリハガリクンは。」

第九話『オコガエリハガリくんは。』（後書き）

ダダダダダダダ
ヤクザファイブ！

仁義の杯交わした正義の5人！

敵は腐った国家公務員達だぜ！

強き任侠でこの国変えろ（Yes！親分！）

不動の漢！ヤクザレット！

インテリ極道！ヤクザブルー！

フィジカルすごいぜ！ヤクザイエロー、
チンチロ無敵だ！ヤクザグリーン！

ツンツンビューティー！ヤクザピンク！

腐った心を浄化しろ！

伝家の宝刀！セイントドス！

行くぜ〜我が〜ヤク〜ザ〜〜ファイブ!!!

針金「……」プシッ

針金「……」ヤッぱらアウアでしょー!!!

第十話『面倒臭いなあ。』（前書き）

ていん？がー！」「連日投稿できなくてすみません！言ったら今日中に三部投稿しなければいけないので毎回やっている前書きと後書きは時間の都合上、しばらくしません！さて、お待たせしました！それでは今話もどうぞ！！」

カフサミ「ただ面倒臭いだけだろう。」

ていん？がー！」「うるせえ！」

感想お待ちしております。それと応援よろしくお願いします。

第十話『面倒臭いなあ。』

「はあっ、はあっ

よし、何とか怒江達を撒けた！

ったく、怒江のやつめ…

下校の間一緒に話すのはいいけど、その会話の内容がシャレにならないんだよ。

しかも今日はいつにも増して会話の一方通行がヒートアップしてだし、くじらの俺を見る視線で近くを通る人は全部避けてくし…

…まあとにかく今日は怒江達に見つからないようにひっそりと帰ろう。
「う。」

そう呟くと芳賀裏はいつも使っている通学路ではなく別の道のほうに歩いていった。

「…どつしどつ。」

怒江達に見つからないようにどんどん知らない道をいつの間にか都市街についてしまった…

参ったな…。

ここには何回か来たことはあるけど歩いていたら結構時間がかかるな。

んー、しょうがない。

怒江達に見つかるのを覚悟してまっすぐ家に帰ろう。

そう思い、家までの帰宅路につこうとした時、

前方の曲がり角から1人の少年が出てきた。

その少年は小学校高学年ぐらいで緑色の少しパーマのかかった髪に
どことなく眠たげな感じはするが整った顔をしていた

けど

その目にはまるで感情という感情がないと思う程虚ろで、俺はその
少年に少しばかりの違和感を感じた。

が、芳賀裏が少年を見ているとき突然車が飛び出して少年に突っ込
んだのだ。

「ッ！？危ねえ！！」

芳賀裏はその少年を突き飛ばして何とか事なきを得た。

「おい、大丈夫か？」

「いたた。うん、何とかね。」

「そうか、良かったな。」

「さっきは助けに来てありがとう！
良かったら君の名前を覚えてくれないかい？」

「ああ、俺の名前は御幸返芳賀裏だ。」

「えっ？君がオコガエリハガリくん！？
いや、見つかって良かった！
本当に良かった！」

あつ、そうだ！さっき助けしてくれたお礼にこれをあげるよ！」

「ん？何もないんだが…」

「いやいやあるじゃないか！

すぐそこにね」

ブロロロロロ！！！！！！！

「なっ！！？」

急に爆音が聞こえたと思ったらなんとさっき少年をひこうとした車が曲がって芳賀裏に突っ込んできたのだ。

「クソッ！」

ドシヤアアアアン！！！！！！

芳賀裏はとっさに横に飛んでかわしたが
一瞬でも気づくのが遅ければ今頃は…

「あれ？』さっきの『でいけたと思ったんだけどなあ。」

「てめえ…」

「一体何者だ？」

すると少年は笑みを止め、面倒臭そうな顔をしながら

「ああ、もうこの際だから隠すのも面倒臭いなあ。

はあ、じゃ改めて

僕の名前は皆割石苦流^{みのろしくじりくろう}。

小学五年生の過負荷^{マイナス}だよ。」

「…過負荷^{マイナス}…だと…？」

「そう、過負荷^{マイナス}だよ。」

だけど説明はしない。

だってプラス幸せなやつが僕たち過負荷ふかじゅうやっのことを理解するなんてできっ
ないからね。

ちやほやされてぬくぬくと育ってきたやつが理不尽に殴られ蹴られ
て誰からも忌み嫌われているやつをわかるうなんて。」

「クッ…

…それじゃあ一つ聞くが、お前は何で俺を襲ったんだ？

幸せなやつが気に入らなかつたからか？」

「とんでもないとんでもない。僕はそんな八つ当たりみたいな理由
でやったりしないよ。」

ただ、『ある人』が言ったんだ。

『オコガエリハガリは殺してはならない。』って。

ほら、昔からよく言うじゃん、やるなと言われたらやりたくなる。要するに好奇心がくすぐられたり、いや、違うな、うっん。ああもう面倒臭いなあ。まあとにかくそんな感じでいいかな？」

「ツツツツ!!?!」

「まあそんなわけだから
バイバイハガリくんっ!!」

そう言うと同時に皆割石は俺の首を絞めにかかった。

俺はギリギリ左に逸れることで何とか直撃は免れたが皆割石の手が首をかすめた

その瞬間、俺の頭上から看板が落ちてきた。

俺はそれも避けようとしたが落ちた時に看板の破片が飛び散り、俺の背中に刺さった。

「ガッツ！！！」

背中からどくどくと血が流れた

（おかしい…）

やつの手に触れたあとにトラックが突っ込んで来たり、看板が落ちてきた…

偶然に起こったとしてもおかしいし、やつの言い分からして十中八九やつが起こしたに違いない。

やつの能力は恐らく手で触れたものに災い^{スキル}を起こす類いのものだろう…。

なほほ

『思い通りにやつの手を避けることができる』『よっにするまでだ！』（

次の瞬間、皆割石は俺の体を掴もうとしたが俺はなんなくその手をよけることができた。

皆割石はまたも俺の体を掴もうとしたがそれも避けられた。

「…………チツ、面倒臭いなあ。」

今度は急に当たらなくなったよ

面倒臭いけど『当たる』まで何度もやってみるか。」

そう言っつて皆割石は何回も何回も何回も俺に触れようとしたが俺はそれを全部紙一重で避けていった。

そして皆割石の攻撃を避けてる内にいつの間にか交差点に出ていた。

この交差点はさっきの通りと違いちらほらと人通りがあった。

「もう諦めるよ皆割石

何千回やってもお前の攻撃は当たらないぜ。」

「そんなこと言うなよ、ハガリくん。

面倒臭がりな僕が一生懸命頑張ってるときにそういうこと言われたらショックでへこんじゃうよ。」

それに勝負するのは最後まで何が起こるかわからないもんだぜ。」

皆割石がそう言った瞬間、急にゴウツと突風が吹き荒れた。

俺は突然のことに驚いてつい動きを止めてしまった。

バキンッ！

突風が吹き荒れてるときに上から破裂音が聞こえた。

まさか…

このあと起こることが鮮明に映し出されたので
上を見ると

こっちに向かって折れた信号機が飛んできた

多分、老朽化した信号機が突風に耐えられずに折れたのだろう

俺は飛んできた信号機を避けようとしたが

反応が遅かったのか

信号機を避けきることはできずに右足を直撃した。

「グガアアアアアアアツツツ!!!」

見れば信号機が直撃した右足は潰れており、文字通りのグチャグチャになっていた。

「ほらね、こんな逆転劇も起こっただろ？」

皆割石は

（クツ…一体どういうことだ…？）

やつは俺や信号機どころか『何にも』触れてなかったのに突風が吹き荒れて信号機が折れて飛んできた…

この間にやつは手で触ってない。

え？

ちよつと待てよ…

…『突風』が吹き荒れて信号機が折れて飛んできた…

突風…

ッ！？ということは…)

「おや、その顔は大方気付いたってことかな？

すげいや！僕の過負荷マイナスに自力で気付いた人なんて初めてだ！

ごほつびに僕の過負荷マイナスの全てを教えてあげるよ！

ほら！起こしてあげるから立って！」

そう言つて皆割石は手を差し伸べようとするが

俺は手に触れた瞬間に俺を殺すつもりだろうと思ひ、手を出さなかつた。

すると皆割石は面倒臭そうな顔をし、

「はあ、面倒臭いなあ。

人の親切は素直に受けとるものだよ。」

そう言っただけで皆割石はため息をついた。

しかしその時、俺の正面から何やら大きな音が聞こえてきた。

正面を見ると、コントロールを失った大型バスがこっちに突っ込んできたではないか。

「うんうん、良い顔をしてるねハガリくん。

恐怖に混乱に憤慨に後悔に愚かさの不甲斐なさに哀しみに惨めさに憎しみに醜さにみつともなさに見苦しさにそして絶望に塗りたくられた顔こそが人間のあるべき顔だよ、うん良かった良かった。

これでハガリくんは一足先に地獄を味わえるね。」

そう言ったあと、皆割石はアッと声を上げる。

「そう言えば、ごほうびに僕の過負荷マインナスを教えるんだっただけ。いやいや、すっかり忘れてたよ。

それじゃあ

久しぶりの運動で疲れたしゃっぱり面倒臭いから僕は帰るね。」

そう言って皆割石は芳賀裏からスタスタと離れていった。

そうこうしている内にバスはもう100メートルの距離まで来ていた。

俺はバスから逃げるために残った左足を動かそうとしたがさっきの衝突の余波なのか信号機の破片が無数に突き刺さっていて思うように動かせなかった

キイイイイッツッ！！！！

ゴシヤアアアアアアアアアア！！！！！

第十一話『おせねえよ』

「はーくうーん！」

どこにいますのぉー！」

「なあ、怒江ちゃん。

こんなところに芳賀裏がいるわけないだろ？
今頃とっくに家に帰ってるって」

「いえ、そうとは限りませんよお姉さま
さつき芳賀裏の家に電話をかけたところ
まだ芳賀裏は帰って来てないそうです。
ですから芳賀裏が行ったことのある場所を探せばきっと見つかるで
しょう。」

「わあ、さつきがめだかちゃん！

頑張って探そうね、くじらちゃん」

「はあ がりい

！どおこだああ

！……！」

ダダダッ

ダダダ

「芳賀裏くん、どこにいるのかな？」

怒江、くじら、めだか、善吉は芳賀裏を探しにきていた。

事の経緯を追っていくと、まず最初に彼らはいつも通りに芳賀裏と針金と一緒に下校をしていた。

その途中に針金は一同と別れたのだが、その瞬間に下校の度に聞かされる怒江の教室、自宅ノンストップヤンデレOHANASHIの内容に拍車がかかったのだ。

それだけではなく、くじらからが終始芳賀裏にそれはそれは恐ろしいガンを飛ばしていたので、通行人どころか道端の犬猫ですら恐れをなして全速力で逃げだしたのだ。

大人びているとはいえまだ小学生の芳賀裏がその場に耐えられる訳もないので（大人でも無理である）逃げ出したので今に至るということになる。

「それにしてもここに来るのって久しぶりだね、めだかちゃん。」

「うむ、そうだな。」

この都市街には私の車で何度も来ていたな。」

「ああ、そういえばはーくん喜んでもらうために靴の材料を買いに行ったっけなあ。それで作った靴を渡したとき、はーくんったらあんなに照れちゃって…えへへ。思い出したら熱が入っちゃったわ。よし！今度来たときにまた買いにいきましょう。そうだ、くじらちゃんも今度の日曜日に一緒にはーくんの靴の部品を買いにいかない？私、はーくんと一緒にいるのも好きだけどくじらちゃんと一緒にいるのも好きだよ！だからよかつたら今度の日曜日にここで靴の部品を買いにいかない、くじらちゃん？」

「う、うおおおお　　！！！！

当然！勿論だ怒江ちゃん！！今度の日曜日は空ける、絶対空ける！！何があるうと絶対空けるぜ、怒江ちゃん！！！！」

周りから見ても怪しい集団に見えるがそれは伏せておこう

一同がしばらく歩いていると車が壁にぶつかっていたのが目に映る。

さらに近くには看板がグシャグシャの状態で落ちていた。

普通ならあり得ない、車に続いて看板が落ちている場面など

すると怒江は看板の近くに何かを見つけたらしくそれを拾ってよく見てみた瞬間、あり得ない、と言いそうなほど驚愕に顔を歪ませた。

「ど、どうしたんだ！？怒江ちゃん！」

「じ…これ…」

怒江のただならぬ様子に急いで駆けつけたくじらが怒江が手に持っているものを見ると小さくアツ、と声を漏らした。

243

「これは…芳賀裏が付けてたお守りじゃねえか…」

怒江の手には血で汚れたお守りがあった

芳賀裏は常にランドセルにこの安全祈願のお守りを付けており、今まで外したことがなかった

しかしそのお守りが血だらけで落ちているという事は…

最悪の未来を払拭しようとしてふと地面を見た時、怒江は点々と血痕が続いているのに気付いた。

その血痕はずっと前に続いており、一同は不安を抱きながらもその血痕を辿っていた。

しばらく血痕を辿っていると前方から悲鳴が聞こえてきた。

悲鳴が聞こえてきた方を見ると、いつの間にか一同は交差点に出ていた。

そしてその交差点は破損した信号機が落ちており、さらに破損した信号機の近くのビルには大型バスが突っ込んでおり、そのビルからは火事が起こっていて一目でわかる大惨事だった。

当然、その交差点には通行人がいたので狼狽える者から悲鳴をだす者、あるいは救急車、消防車を呼ぶ者、そしてこの大惨事を見ようと集まった野次馬がいた。

一同はこの大惨事により、不安がより濃くなり一つの推測が頭に浮かんだ

『あの惨事に芳賀裏が巻き込まれているのではないか？』

一同はその予感と共に野次馬を避けながらバスが突っ込んだビルへと向かった。

が、ビルにたどり着いたとき、ビルから少し離れた場所に緑色の髪をした少年が空を眺めていた。

少年はあの大惨事の中にも関わらず、まるで何もなかったのよう
に儂く微笑みながら空を見ていた。

場面が違えば微笑ましく思うが、阿鼻叫喚が飛び交う大惨事の中に
いるので微笑ましさとどこか異様さが際立っている。

そして何よりは少年の雰囲気だ。

少年を見た瞬間、めだか、くじら、善吉は感じた、いや感じてしま
った。

身の毛もよだつほどの不快感を。吐き気を催すほどの気持ち悪さを。
目を背けたくなるほどの醜悪さを。

本能が目の前の『それ』を拒絶する。早く逃げろ、と。その場にい
たら自分の中の何か壊れてしまう。何もかもが一緒に台無し
にされ、墮落へと引きずり込まれるような嫌悪感に震えが止まらな
かった。

一方の怒江は少年にどこか懐かしいものを感じた。
芳賀裏と出会う前、怒江が怒江だったときのそれだ。
いや、『それ』は怒江よりも明らかに格差が違ふ……
自分よりもずっと弱くて低くて廃れてて墮ちていてどうしようもないぐらい下種だった。

そして一同は少年を見て確信した。

『この大惨事はあの少年が起こしたに違いない』と。

すると少年は一同に気付いたらしくまるで人形のようにグリン、と振り向いて声をかけてきた。

「やあやあ、江迎怒江ちゃんに黒神めだかちゃん、黒神くじらちゃん
んと人吉善吉くんじゃないか。」

「クククッッッ！……！！」「」「」

「こんなところで出会えるなんて！
幸運？偶然？奇跡？なにせよ出会えて嬉しいよ！」

一同は少年とは初対面のはずなのになぜ自分の名前を知っているのかということにより一層気持ち悪さを覚えたが、怒江だけはそれに屈せず敵意の視線を以て質問した。

「あなたは何者なの？」

そして何の目的があつて『こんなこと』をやつたの？」

すると途端に少年は笑みから面倒臭そうな顔になった。

「はあ、僕がやつたなんて証拠もないのに決めつけるなんて酷いなあ。ショックで心が折れちゃいそうだよ。まあ、正解なんだけどね。

さて面倒臭いけど質問には答えなくちゃな。

僕の名前は皆割石苦流。

小学5年生の過負荷だよ。
よろしくね。

それで何で僕がこの大惨事を起こしたかというかね。君たちは神様を信じてるかい？僕は信じてるんだ。善行を積みめば神様が天国に導いてくれるって言われているけど逆に悪行を重ねると地獄に落とされるとも言われているよね？僕は後者のほうが好きなんだ。何でかって言うかね、善行を積んでやっとなんて面倒臭いのには悪行を積んで楽に地獄のほうが面倒臭がりの僕でもできるし、何より地獄なんて僕にぴったりじゃないか。それに生きているこの人生も僕は大好きだよ。だって世の中は理不尽に迫害され常に強者が弱者を虐げる樂園じゃないか。それに僕は神様が大好きだよ。だってこんな見苦しくてみじめで不幸せで不条理で被虐で醜くて救いようのない人生に生み落としてくれたからね。だから僕は神様に感謝してるんだ。それによく言うじゃない。自分の幸せを人に分けたら気持ちが良いってね。だから僕はこんな風に皆に分けてるんだ。自分も他人も不幸を味わって地獄を見ればそれはとっても嬉しいことなんじゃないかなってね。」

終わってる…

一同はまず最初にそう感じた。

ドギヤアアッ！！！！

皆割石はビルの壁におもいきり打ち付けられた。

「めだかちゃんッ！」

「あ…あああ…」

めだかは初めて対面した過^{マイナス}負荷に恐怖と怒りを感じて思わず本気で殴ってしまったが見知らぬ他人のために生きること^{を信条として}いるがゆえにその他人を攻撃してしまったことに大きく心が揺らいでしまった。

が、しかし

皆割石はまるで操り人形を起こしたかのような気持ち悪い動きで起き上がった。

「それにしても人が話してる途中に殴るなんて人として最低だよ。君は敵討ちだと思って僕を殴ったのかい？それはちゃんちゃら八つ当たりだよ。だっていくら僕を殴ってもハガリくんは喜ぶかい？君はハガリくんのために見知らぬ他人を虐げた。それでハガリくんは友達の残虐な行為に憂い、君は自分のやったことに後悔し続ける。やったね！これで君も僕と同じ景色じくを見れるんだ！嬉しいよ！」

「私は……私は……」

「めだかちゃん惑わされないで!!」

「!?!?!」

皆割石の言葉に混乱したためだけに怒江が声を張り上げた。

するとそんな怒江に皆割石は近づぐ。当然、怒江は皆割石をキツ、と睨み付け警戒するが皆割石はそんなことお構い無しに近づぎ、怒江の前に来た。

「あれ？そういえば怒江ちゃんは過負荷マイナスじゃなかったっけ？おかしいなあ、もう改心したのかあ。せつかく良い友達になれると思ったのに。」

そう言いながら皆割石は怒江の手を握るが、怒江はすぐに手を払いのける。

「酷いなあ、すぐに払いのけなくてもいいじゃないか。そんなことされたらショックで立ち直れなくなるよ。まあ、どうでもいいけど、それにしても手に触っても腐らないってことは荒廃ラフした腐花ラフレシアが無くなってるんだね。まさか本当に過負荷マイナスじゃなくなってるなんて寂しいなあ。

まあいいや。それよりも君にはとっておきの地獄フレゼンダをあげるよ！
この僕の『墮ロストちた大空ライブ』でね。」

その瞬間、広告塔の看板がバキツと外れて怒江に向かって落ちてきた。

怒江は避けようとするが急に視界がぐらついたので避けなかった。

もうダメだ…

そう諦めたとき

「させねえよ」

バキィッ！！

ゴガッ！！

「グガッッ！？」

看板が怒江に当たる直前に横から何者かが飛び出して看板を蹴り飛ばした。
蹴り飛ばされた看板はそのまま皆割石に当たった。

「よっと…ふう、大丈夫か、怒江？」

何者かは安否の確認と同時に怒江の手をとる。

怒江はその者の顔を見ると安堵に綻んだ。

「あ、ああ…は、はーくんっ!!」

それは紛れもない芳賀裏その人だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1632x/>

俺達と私達の最幸な世界

2012年1月6日08時49分発行